貝塚市埋蔵文化財調査報告 第30集

加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要

－都市計画道路文化会館山手線建設に伴う調査－

1993. 9. 30

貝塚市教育委員会

はじめに

加治神前畠中遺跡は、本市の中央部を流れる近木川右岸に位置し、縄文時代より続く本市最大の遺跡範囲を有する遺跡であります。従前の調査では、市役所庁舎周辺において古墳時代から中世にかけての遺構を多数確認しており、当地域にその時代の中心部があったことが推定できます。

今回、その中心部に新たに調査のメスが入り、本遺跡の歴史を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の歴史の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

貝塚市教育委員会

教育長　福井昱彦

例　　言

1.　本書は、貝塚市役所建設部道路課の依頼により、大阪府貝塚市畠中、石才地内に所在する加治神前畠中遺跡において実施した、都市計画道路文化会館山手線建設に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2.　調査は確認調査を平成３年11月５日より11月８日にかけて実施した。本格的発掘調査は工事の関係から２次にわけ、平成４年１月16日から３月20日にかけて（第１区）、同年４月13日から６月26日にかけて（第２区）実施した。なお、内業調査については平成５年３月31日に終了した。

3.　調査にあたっては、貝塚市役所建設部道路課より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4.　発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一の指導のもと、上野裕子が担当し、三浦　基が補佐した。

現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業について下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

梅本輝雄	河瀬圭輔	下中良仁	清水久子	宝本幸代	田代自子
田渕広巳	辻　栄子	辻ノさとみ	中辻澄子	古家拓実	米子千智

5.　本書の執筆は第１章を前川が、その他は上野が担当し、編集は上野が行った。

6.　遺物写真撮影は上野が行った。

7.　出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第1章　調査に至る経過……1
第2章　位置と環境……3
第3章　調査結果……5
1.　調査の概要……5
2.　基本層序……17
3.　検出遺構……17
4.　出土遺物……38
第4章　まとめ……48

図版目次

図版１　検出遺構
1. Ａ区第５層上面検出遺構
2. Ａ区第６層上面検出遺構

図版２　検出遺構
1. Ａ区地山上面検出遺構
2. Ｈ区第４層上面検出遺構

図版３　検出遺構
1. Ｈ区第５層上面検出遺構
2. Ｈ区地山上面検出遺構

図版４　検出遺構
1. Ｐit12
2. Ｐit12遺物検出状況

図版５　検出遺構
1. 踏み込み跡
2. Ｄ区Ｐit群

図版６　検出遺構
1. Ｄ区Ｐit群
2. 同上

図版７　検出遺構
1. ＳＤ－３，４
2. ＳＤ－５，６，７

図版８　検出遺構
1. Ａ区　ＳＤ－５
2. Ａ区　ＳＤ－６

図版９　検出遺構
1. ＳＤ－1，2
2. ＳＤ－16

図版10　検出遺構
1. ＳＤ－18
2. ＳＤ－17

図版11　出土遺物
Ｐit12（1～3、5）
Ｐit16出土土器

図版12　出土遺物
包含層第4層（66、71～72）、第5層（33～52、62～63）第6層（25）出土土器

図版13　出土遺物
踏み込み跡（73）、第6層（74～76）出土石器

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　調査区概略図
図５　調査地土層概略図
図６　第１区第４層上面、第５層上面検出遺構
図７　第１区第６層上面、地山上面検出遺構
図８　第２区第４層上面、第５層上面検出遺構
図９　第２区第６層上面、地山上面検出遺構
図10　石列
図11　ＳＤ－１、ＳＤ－２
図12　ＳＤ－３、ＳＤ－４
図13　ＳＤ－５、ＳＤ－６、ＳＤ－７、踏み込み跡
図14　Ｐit 12
図15　Ｄ区　Ｐit 群
図16　Ｄ区　Ｐit 群
図17　ＳＤ－16、ＳＤ－17
図18　Ｇ区　Ｐit 群
図19　Ｐit 12 出土土器
図20　Ｐit ７（７、８）、Ｐit 16（９）出土土器
図21　ＳＤ－１（10、11）、ＳＤ－３（12）出土土器
図22　第１区鋤溝出土土器
図23　第２区鋤溝出土土器
図24　包含層第６層出土土器
図25　包含層第５層出土土器
図26　包含層第４層出土土器
図27　踏み込み群（73）、包含層第６層（74～76）出土石器

第１章　調査に至る経過

貝塚市役所では、平成５年市制50周年を迎え、その記念事業の一環として、貝塚市民文化会館建設を計画し、平成３、４年度建設、平成５年度オープンという全体案が決まった。建設に当って施設への進入前面路として都市計画道路文化会館山手線設置が計画された。そこで、事業担当の建設部道路課より埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申入れがあった。

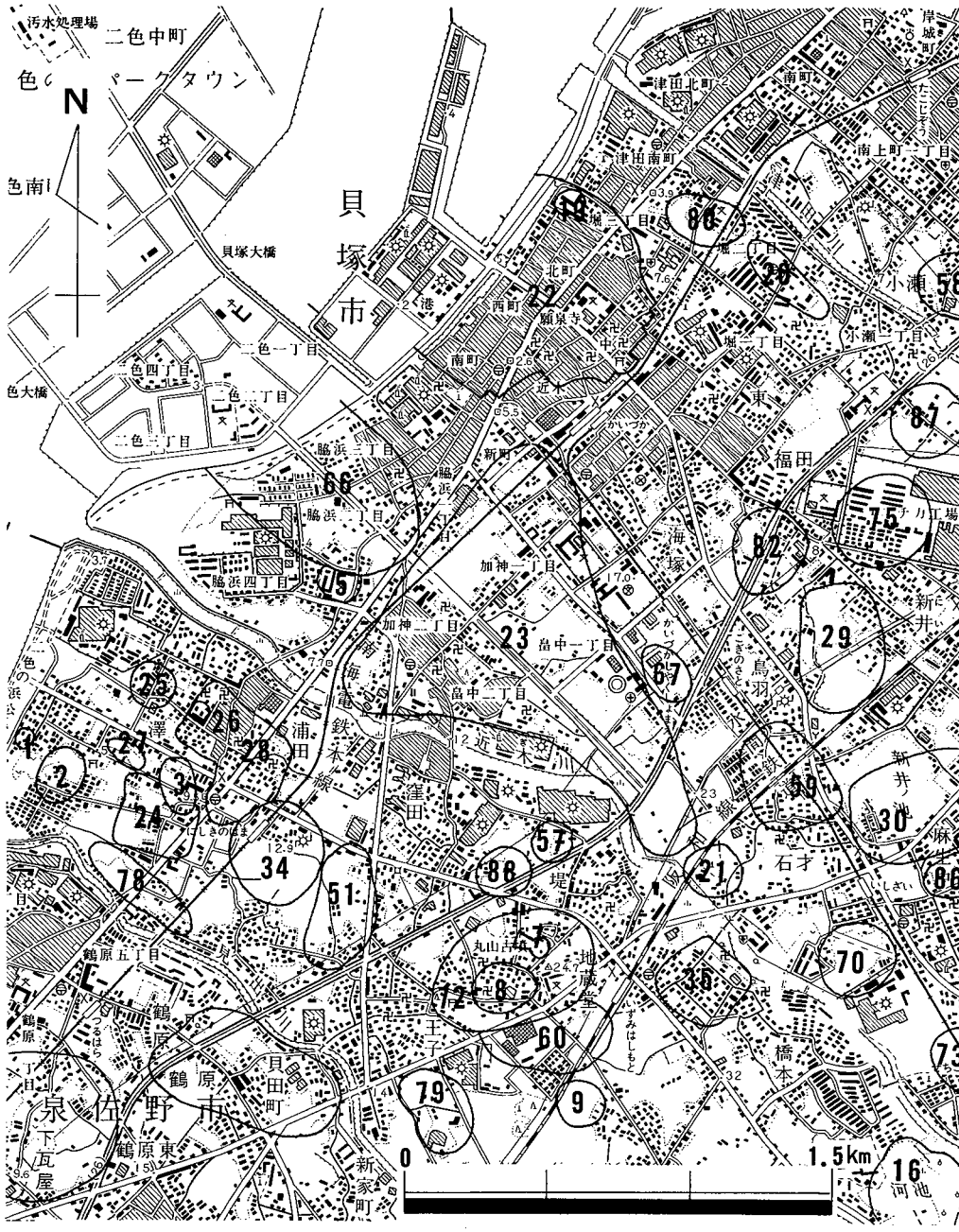
開発予定地は周知の遺跡、加治神前畠中遺跡に含まれ、従前の調査によって古墳時代から近世にかけての遺構が集中する部分であることが明らかとなっている。また、貝塚市民文化会館建設予定地での調査においても多数の遺構を検出している。したがって、今回の開発においても多数の遺構を検出することが充分考えられた。

しかし、開発地内には既設の水路等、大型の構造物が多数存在しており、従前に遺構等を破壊しているとの開発担当課からの意見があった。協議を重ねた結果、遺構確認調査を実施したうえで、遺構の存在が明らかとなった場合は本格的調査を実施することの合意を見た。

遺構確認調査は開発計画に基づき、平成３年11月５日より11月８日にかけて実施した。その結果、既設の水路、道路部分は大幅な削平を受けている事が判明したが、それ以外の部分のほぼ全面に中世の遺物包含層、遺構が存在していることが明らかとなった。

この結果をもとに、再度開発担当課と遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、工事によって破壊等を受ける部分約970㎡について本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査は開発工事の関係から２次に分け、東半部分を平成４年１月16日から３月20日にかけて（第１区）、西半部分を平成４年４月13日から６月26日にかけて（第２区）実施した。



1.沢新出遺跡 2.沢海岸遺跡 3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.丸山古墳 8.地蔵堂廃寺跡 9.下新出遺跡 16.河池遺跡 19.泉州麻生塩壺出土地 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治神前畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 51.窪田遺跡 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 70.石才南遺跡 72.地蔵堂遺跡 73.名越西遺跡 75.新井鳥羽北遺跡 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡 82.福田遺跡 86.麻生中出口遺跡 87.小瀬遺跡 88.堤三宅遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

第２章　位置と環境

加治神前畠中遺跡は近木川と津田川に挟まれた洪積段丘上に位置し、東西約1.5 km・南北約１kmの範囲に及ぶ弥生～中世にかけての遺跡である。当遺跡の周辺には、北に縄文～江戸時代の生産・集落跡である脇浜遺跡や中世から近世にかけて栄えた貝塚寺内町遺跡、西に根来衆の出城とされる沢城跡や弥生～中世・近世にかけての集落跡である沢遺跡、平安時代の寺院跡である明楽寺跡、南に国指定文化財の丸山古墳とそれをとり囲む埋没古墳、平安時代の寺院跡である地蔵堂廃寺、またそれらを包括する古墳～中世の集落跡の地蔵堂遺跡、東に弥生～古墳時代の散布地である今池遺跡、弥生～中世の散布地である新井・鳥羽遺跡、ユニチカ工場地開発に伴う試掘によって発見された新井・鳥羽北遺跡などが存在する。（図１）

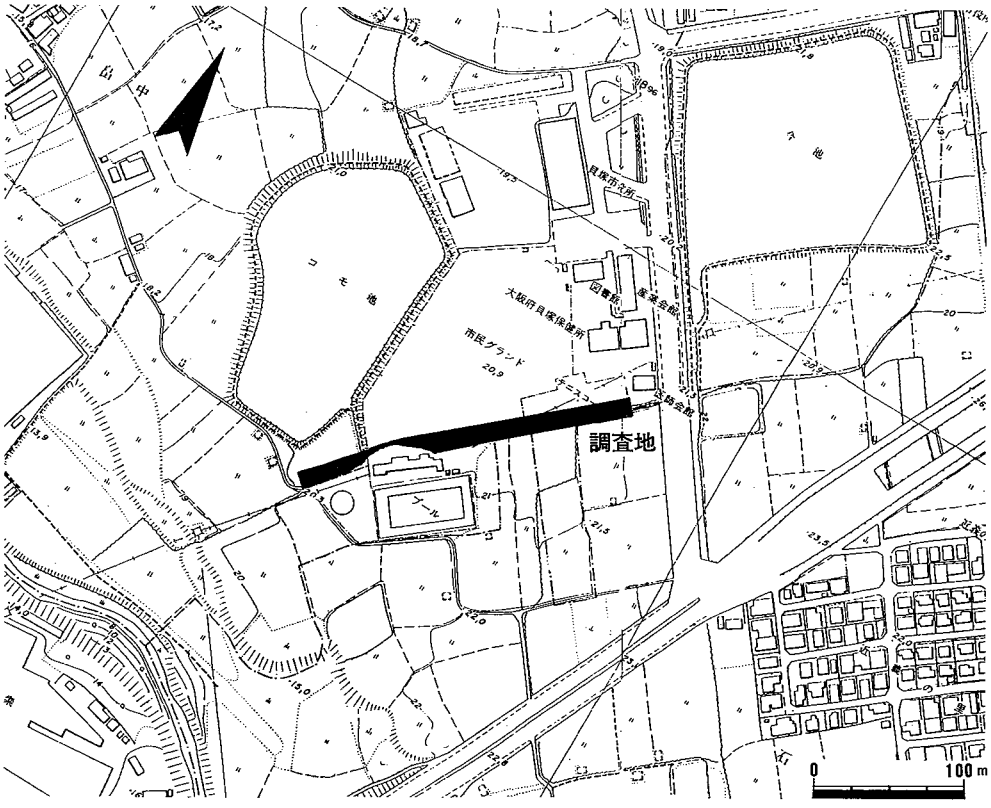


図２　調査地位置図

調査地は貝塚市役所の北側、市民文化会館建設地と市民第二プールとの間にある文化会館山手道路建設予定地である。

当調査地周辺は近年開発が著しい地域であり、それに伴う調査によって、弥生時代～古墳、飛鳥奈良時代を経て中世に至るまで集落が営まれていたことがわかっている。

調査地周辺では、昭和54年に財団法人大阪文化財センターが貝塚中央線の新設に伴って調査を行なっている。その結果、コモ池の西側に接して弥生時代の堆積土層が存在しており、池の南側には弥生～古墳時代の遺構が、また東側には飛鳥～奈良時代の遺構が存在することが明らかにされた。また、昭和54年に貝塚市教育委員会が行なった調査では、奈良時代の掘立柱建物を検出しており、昭和61年に財団法人大阪府埋蔵文化財協会が行なった貝塚中央線建設に伴う調査では6世紀の竪穴住居跡が検出されている。昭和61年～62年にかけて貝塚市教育委員会が行なった府道鳥羽畠中線建設に伴う調査では、平安時代の溝と建物群、古墳時代の溝などを検出している。平成2年～3年にかけて貝塚市庁舎第1別館、第2別館建設に伴って行なった調査では、古墳時代の溝、平安時代の溝と建物、中世の溝、土坑・柱穴、飛鳥～奈良時代の集落跡などを検出している。また平成3年に調査地の南、市民文化会館建設に伴って行なった調査では、中世の耕作地とその区画溝や奈良時代の大型井戸などを検出している。

また、調査地周辺の畠中を中心に海塚、脇浜～加神、石才にかけての一帯は今も条里の残る地域とされており、高野山近木庄文書に記される近義里、上古家田里，下古家田里がこれにあたるとされている場所である。

したがって、当調査地もこれらと関連した遺構が検出されることが予想された。

第３章　調査成果

１.調査の概要（図３、４）

調査は開発計画に基づき８区画に分割し、北東よりＡ区～Ｈ区とした。その内Ａ～Ｄ区を第１区として平成３年度に、Ｅ～Ｆ区を第２区として平成４年度に調査した。

また、調査区全体を国家座標に基づき５ｍ×５ｍの区画を行い、東西に東よりＡ～Ｚ，Ａ～Ｇの33区画、南北に北より１～31の区画を設けた。（図３）その内、Ｅ区ではＥ－Ｐ・Ｑ－14区付近に広く攪乱が及んでいたため、攪乱部分を除き、調査区を２分した。

調査区は盛土の下、３層の包含層が存在していた。その内Ａ、Ｂ、Ｃ区を除いて他の区は包含層が良好に残っており、各層上面で遺構検出を行った。

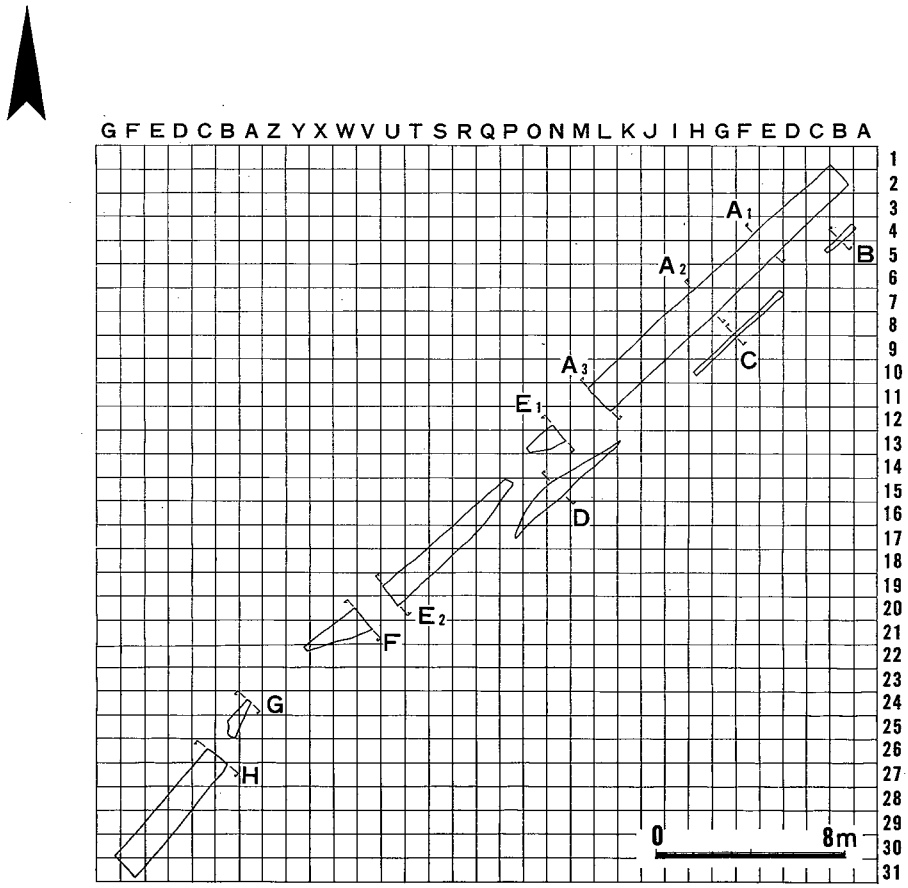


図３　調査区地区割図

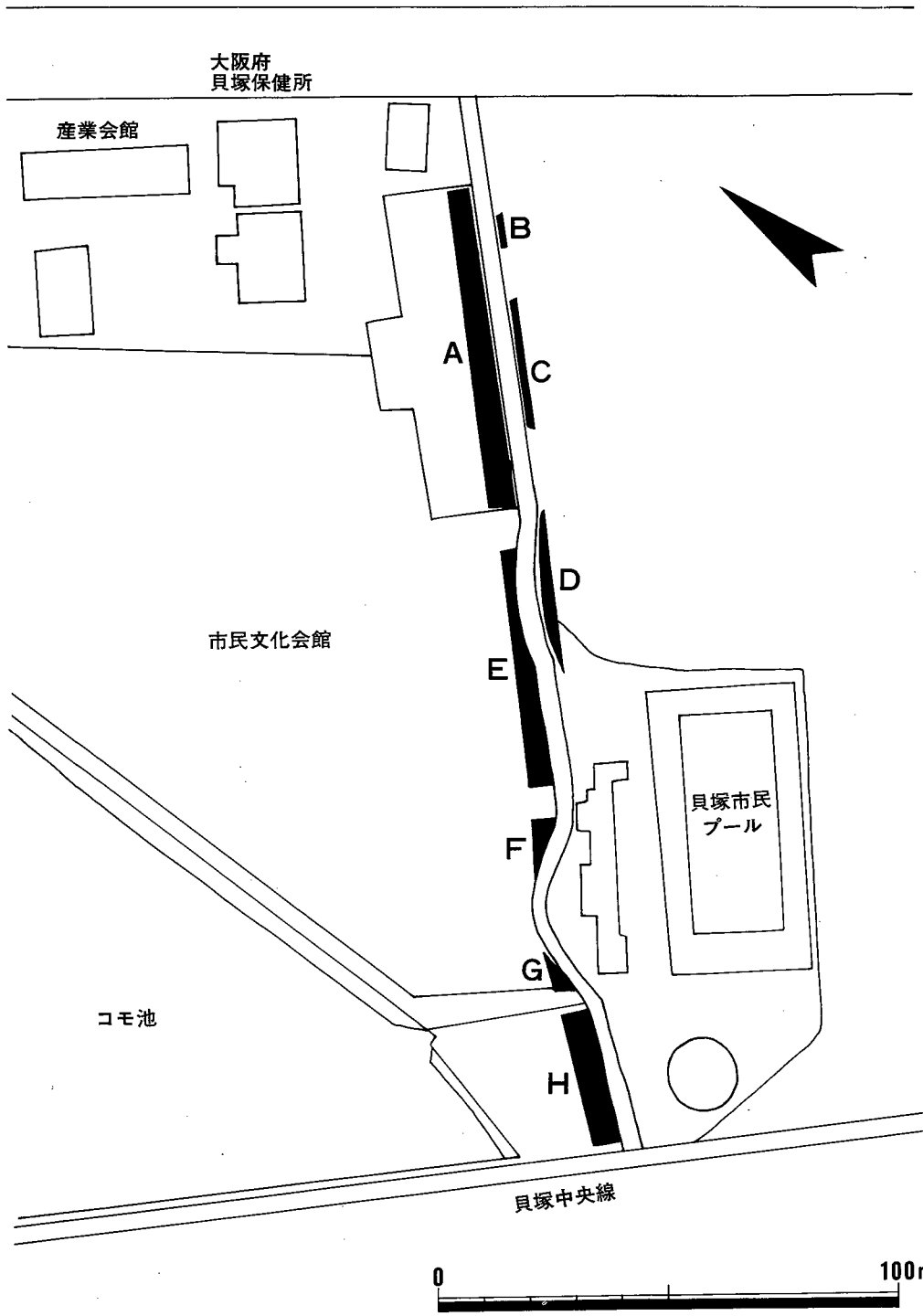


図 4　調査区概略図

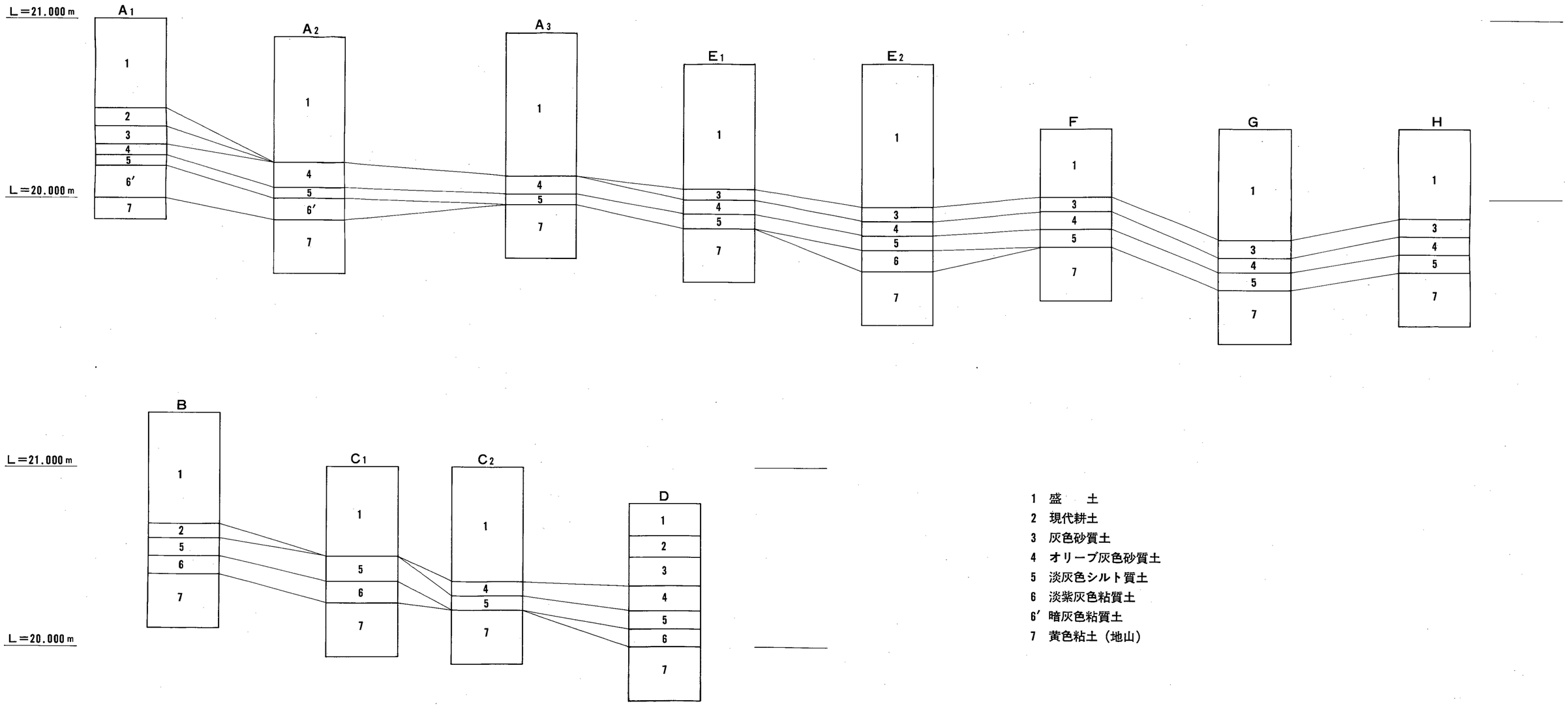

L＝21.000 m
L＝20.000 m
A1
A2
A3
E1
E2
F
G
H
B
C1
C2
D
1 盛　土
2 現代耕土
3 灰色砂質土
4 オリーブ灰色砂質土
5 淡灰色シルト質土
6 淡紫灰色粘質土
6′ 暗灰色粘質土
7 黄色粘土（地山）

図 5　調査地土層概略図

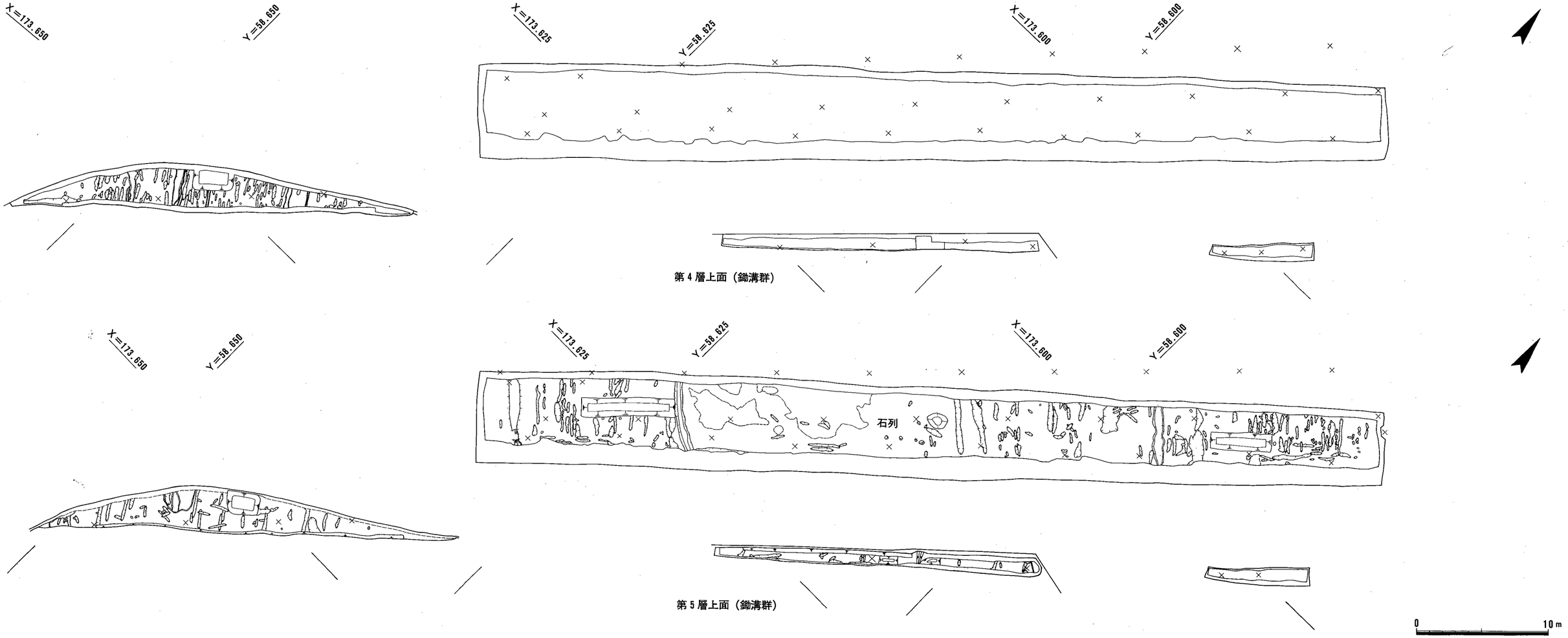


図6　第1区第4層上面，第5層上面検出遺構

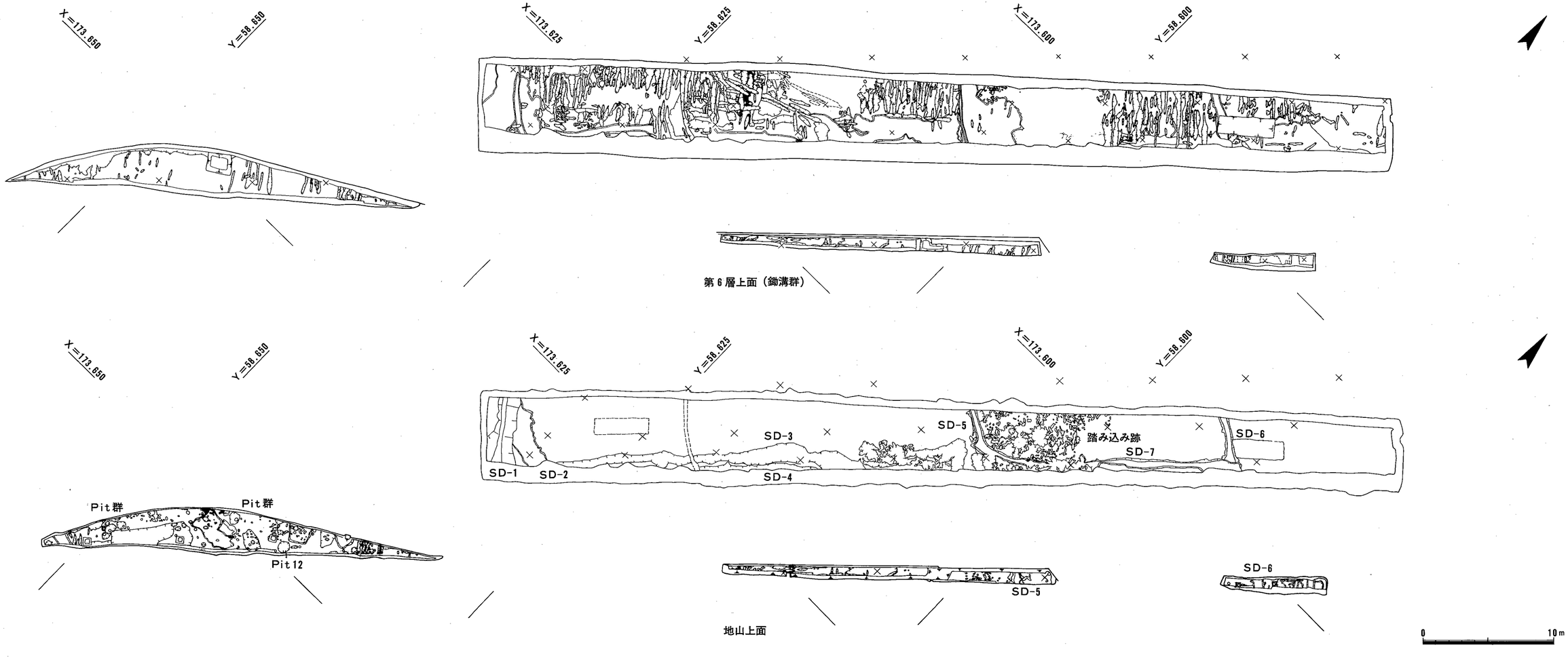


図7　第1区 第6層，地山上面検出遺構

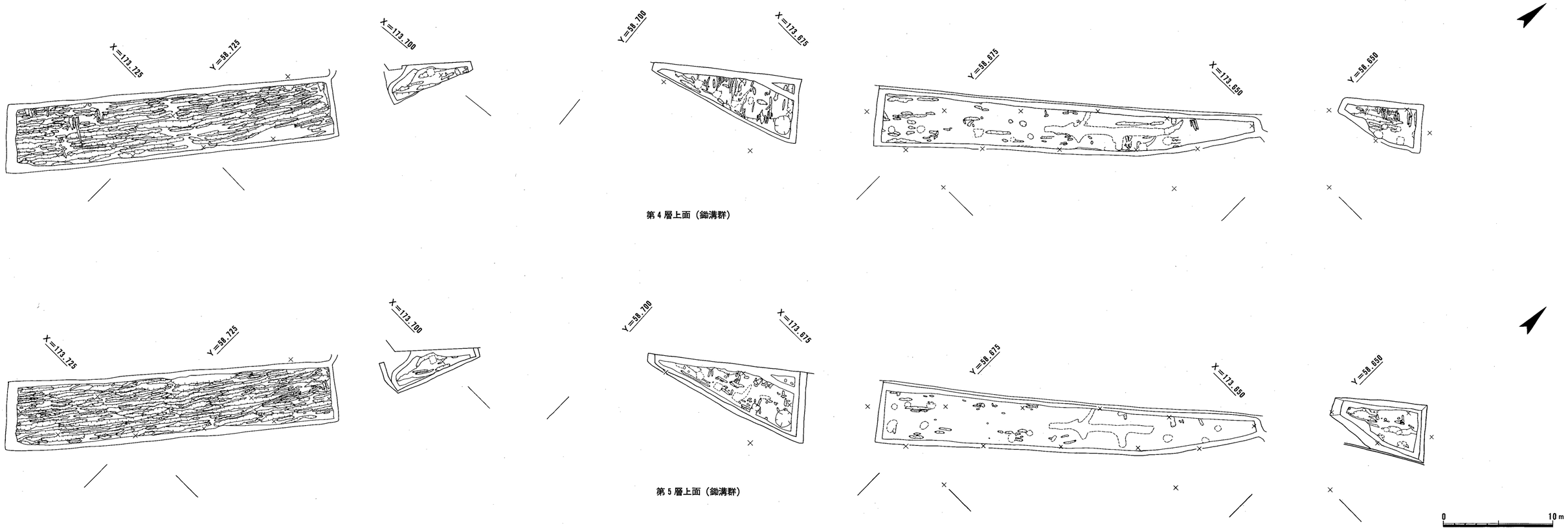


図8　第2区 第4層上面第5層上面検出遺構

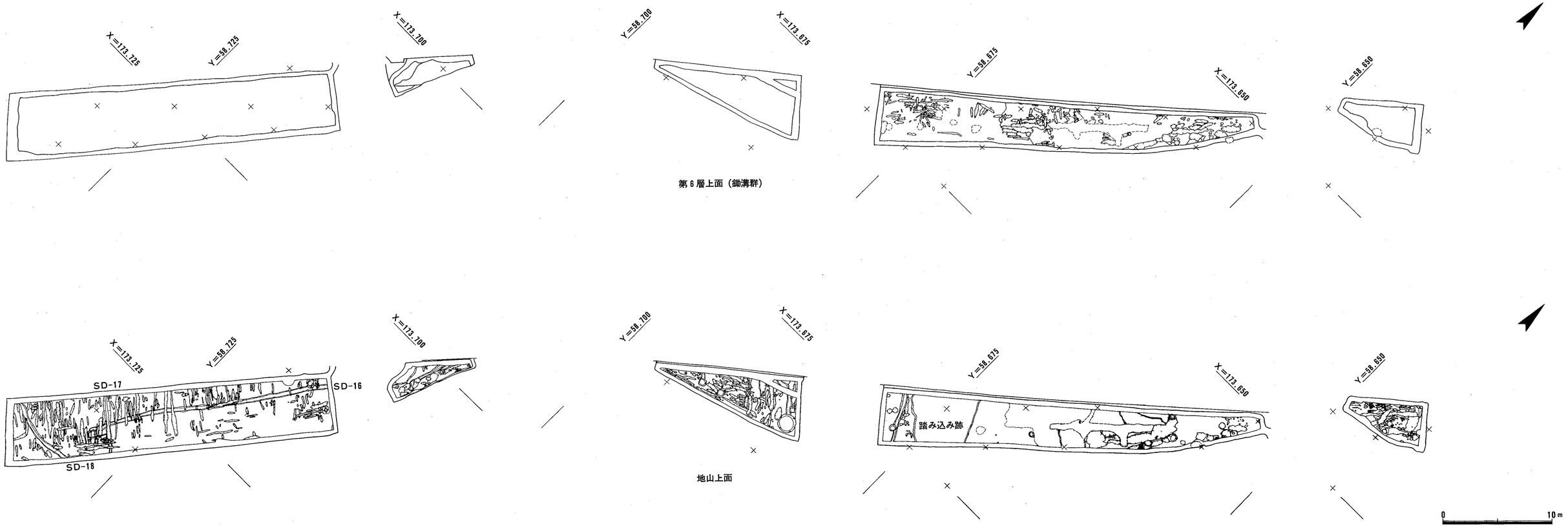


図9　第2区 第6層上面，地山上面検出遺構

2.基本層序（図5）

本調査区では、基本層序は6層に分層できる。以下、上から順に各層の概略を説明していく。

第1層；現代の盛土である。層厚は平均50cmである。

第2層；黒褐色の現代耕作土である。層厚は約10cmである。

第3層；灰色砂質土の床土で、層厚約6～14cmである。

第4層；オリーブ灰色砂質土で層厚6～16cmである。遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土している。

第5層；淡灰色シルト質土で層厚6～15cmである。遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器などが出土している。

第6層；暗灰色粘質土でB、C、D区とE区の一部に存在する。層厚約10cmである。遺物は土師器、須恵器などが出土している。

第6'層；淡紫灰色粘質土でA区にのみ存在する。層厚12cmである。本層は第5層と第6層とを合わせたような様相を呈しており、遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土している。おそらく第5層耕作時に下の第6層を削って耕作を行ったためと思われる。

地山面は調査区ほぼ全域において黄色粘土であり、一部A区の東側が黄色の砂礫層であった。

3.検出遺構

今回の調査では、第4層より各層上面で遺構検出を行なった。しかしA、B、C区では現代の盛土の段階で上層は掘削されたものと思われ、第5層、または第6層の上面から遺構検出を行なった。結果は、各調査区のほとんどで鋤溝群を検出し、中世の土地区画溝と溝、奈良時代の柱穴群等を検出した。また、中世より古い時代のものは第6層が堆積していた部分にのみ存在しており、後は良好には残っていなかった。

以下、主な遺構について各層ごとにその概要を報告する。

第1区

第4層上面検出遺構（図6）

鋤溝群

本遺構はA、B、C区で現代の盛土が深く堆積していたため、D区のみで検出した。鋤溝は調査区全域に広がっており、西に35°振って南北方向に約85本、北に50°振って東西方向に約10本を検出した。鋤溝は遺構の切り合いにより、東西方向のものが、南北方向のものより新しい。いずれも幅15～40cmと細長く、深さは約2～3cmである。埋土は灰色砂質土（第3層）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土している。

第5層上面検出遺構（図6）

鋤溝群

本遺構はA、C、D区全域で検出した。A区では西へ45°振って南北方向に約150本、北へ40°振って東西方向に約35本を検出した。C区では西へ40°振って南北方向に約7本、北へ65°振って東西方向に約3本を検出した。D区では西へ約40°振って南北方向に約25本、北へ約35°振って東西方向に約10本を検出した。南北方向と東西方向の鋤溝は遺構の切り合いから後者の方が前者より新しいと考えられる。いずれも幅15～40cmである。深さは約2～3cmで、埋土はオリーブ灰色砂質土（第4層）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土している。

石列（図10）

本遺構はA－H・I－6区で検出した石列である。南に50°振って東西方向に4個の石が並んでいる。各石間の長さは0.2×1×1.5mである。掘方は直径30cmの円形で、約15～20cm大の石を埋め込んでいる。掘方の埋土はオリーブ灰色砂質土（第4層）である。本遺構は南にのびて建物になる可能性が高いが、調査区外に広がるため不明である。

第6層上面検出遺構（図7）

鋤溝群

本遺構はA、B、C、D区全域で検出した。A区では西に40°振って南北方向に約300本、北に40°振って東西方向に約50本を検出した。B区では西に35°振って南北方向に8本を検出した。C区では西に45°振って南北方向に29本、北に45°振って東西方向に約9本を検出した。D区では西に40°振って南北方向に約45本、北に30°振って東西方向に2本を検出した。いずれも幅15～40cmで、深さは約2～3cmで、埋土は淡灰色シルト質土（第5層）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土している。

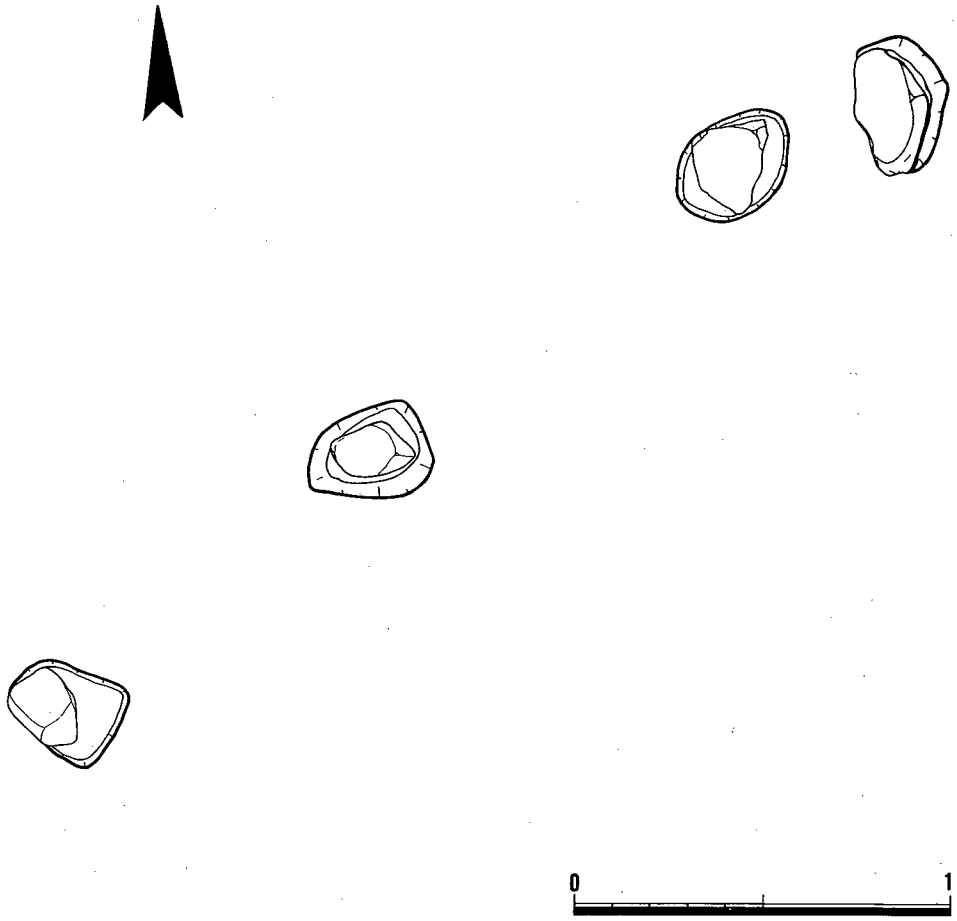


図10　石　　列

地山検出遺構

ＳＤ－１（図11、図版９）

本遺構はＡ－Ｍ－11区で検出した溝である。幅1.5～1.8ｍを測り、西に40°振って南北方向にのび、調査区南側でやや西に向かって曲がっている。断面はＶ字型を呈し、深さ0.9～1.1ｍと深く掘り込まれている。本遺構は平成２・３年度に実施した市民文化会館建設に伴う調査で検出したＳＤ－１と規模などが酷似しており、同一のものと考えられる。本溝は南東から北西に向かって流れ、埋土は粗砂～細砂、粘土が交互に堆積し、緩急の流れを繰り返していたことがわかる。遺物は勝浦氏編年によるⅢ－３期に属する瓦器が出土している。

ＳＤ－２（図11、図版９）

本遺構はA－M－11区で検出した溝である。SD－1などに切られているため、全体の規模は不明であるが、幅1.8mでほぼ東西にのびている。断面は浅いレンズ状を呈し、深さは約0.1mである。埋土は淡灰色砂質土で、西から東に向かって流れている。遺物は土師器、須恵器が出土している。

SD－3・SD－4（図12、図版7）

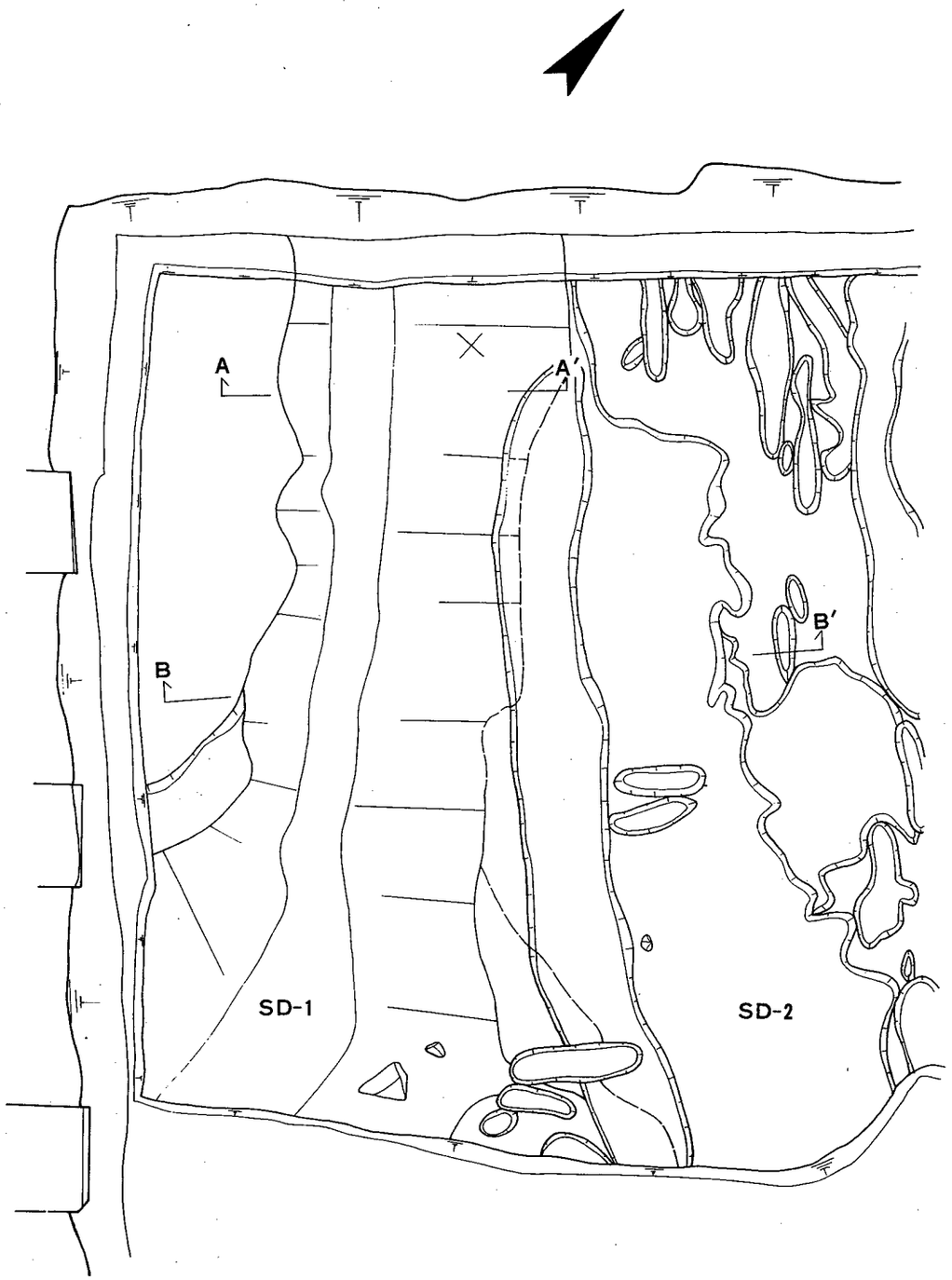
本遺構はA－I～O－7～10区で検出した溝である。SD－3は北に40°振って北東～南西にのび、A－I－26区付近で南に向かって曲がっている。幅1.2～1.6m、深さ0.1mを測り、断面は浅いレンズ状を呈している。SD－4は南側が調査区外になるため規模などは不明であるが、おそらくSD－3と並行すると思われる。断面はSD－3と同様浅いレンズ状を呈し、深さは0.1mである。ともに埋土は淡灰色砂質土で、北東から南西に向かって流れていたと考えられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土している。

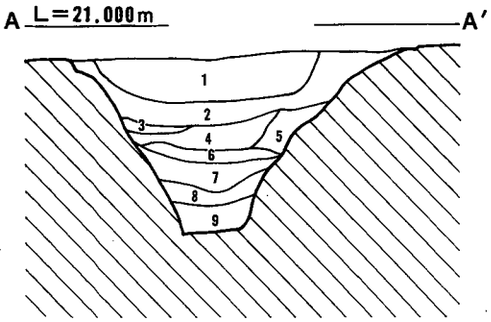
SD－5・SD－6・SD－7（図13、図版8）

本遺構はA区からB、C区にかけて検出した溝である。これらの溝はSD－7を挟んでH字状に検出し、SD－7がSD－5とSD－6を切って位置している。SD－5はA－E－3区からC－C－5区にかけて西に約60°振って北西～南東にのびている。幅は0.8～0.58m、深さ0.2～0.3mを測り、北西から南東に向かって流れている。SD－6はA－G・H－6区からB－F－7区にかけて西に約55°振って北西～南東にのびている。幅は0.7～1.2m、深さ2.4mを測り、北西から南東に向かって流れている。SD－7はA－E～H－4～6区で、北に約45°振って南西～北東にのびている。幅0.6～1.5m、深さ1.4～1.6mを測り、北東から南西に向かって流れている。いずれも断面はレンズ状を呈している。遺物は土師器、須恵器が出土している。

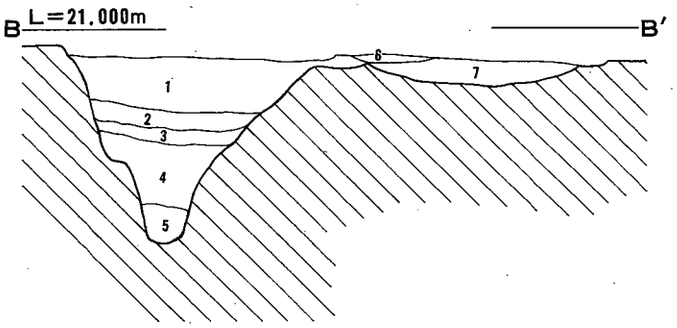
Pit12

本遺構はD－N－14区で検出した柱穴である。建物としては調査区外に広がるため、復元できなかった。掘方は径87cmの隅丸方形を呈し、深さ45cmを測る。柱穴は径22cmの円形で、深さ45cmを測る。本遺構は掘方と柱穴の埋土が非常によく似ており、一見しただけでは見分けがつきにくい。いずれも粘土ブロック、砂礫ブロックなどの混じる暗灰色粘質土であり、おそらく建物終了時に柱を抜いて埋め戻したものと思われる。本遺構の底部には





1 砂礫混灰色粘質土
2 黄色粘土ブロック混灰色砂質土
3 灰色極細砂
4 暗灰色中砂～細砂
5 灰色砂礫混細砂
6 灰色極細砂
7 細砂ブロック含灰色シルト
8 灰色シルト
9 灰色細砂～粗砂



1 砂礫混灰色粘質土
2 灰色粗砂～中砂
3 灰色シルト
4 灰色細砂～中砂
5 灰色極細砂
6 暗灰色極細砂
7 淡灰色砂質土(SD－2埋土)

SD－1埋土

0 1m

0 2m

図11 SD－1，SD－2

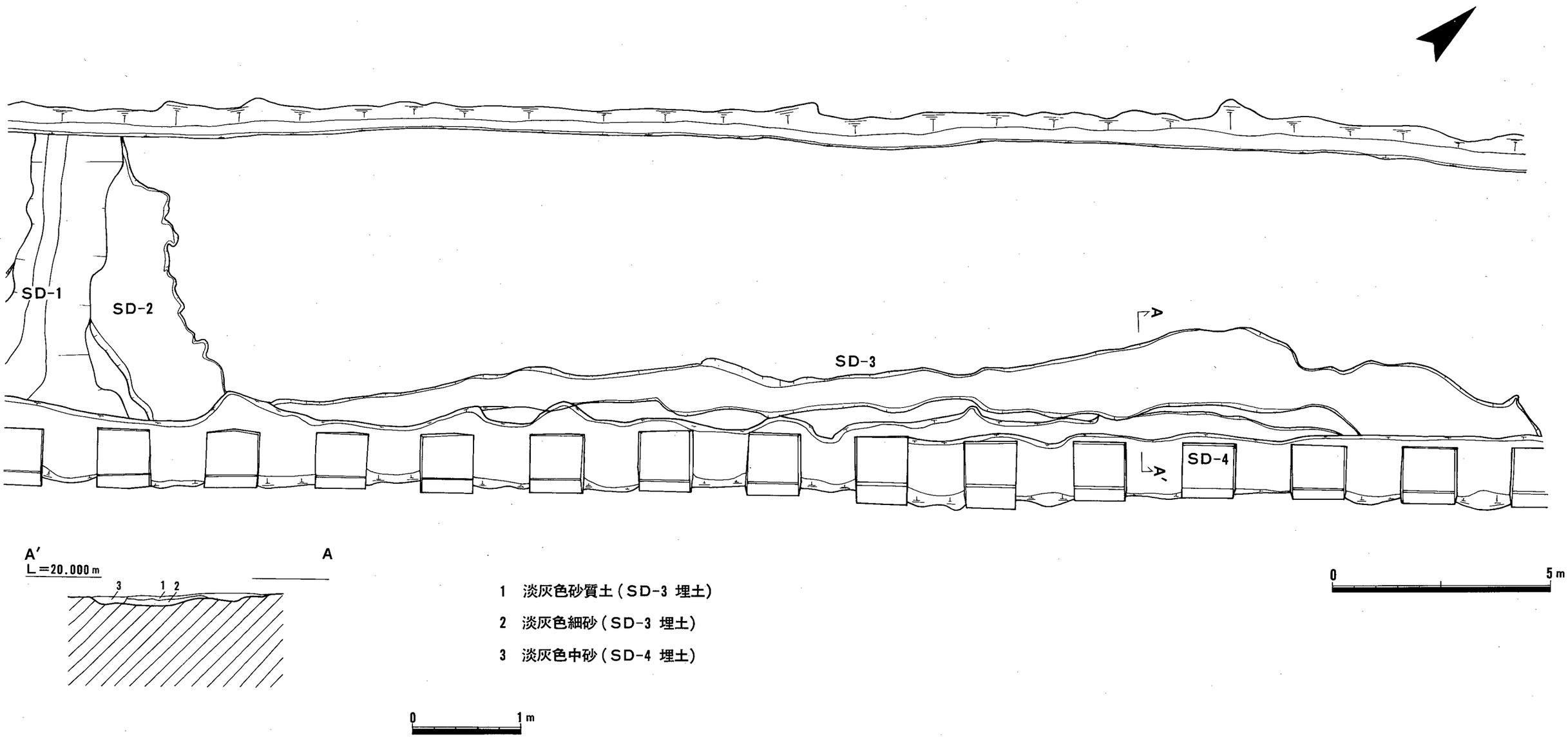

SD-1
SD-2
SD-3
SD-4
A
A'
A'
L=20.000m
A
3
1 2
1　淡灰色砂質土（SD-3 埋土）
2　淡灰色細砂（SD-3 埋土）
3　淡灰色中砂（SD-4 埋土）
0
1m
0
5m

図12　SD－3，SD－4

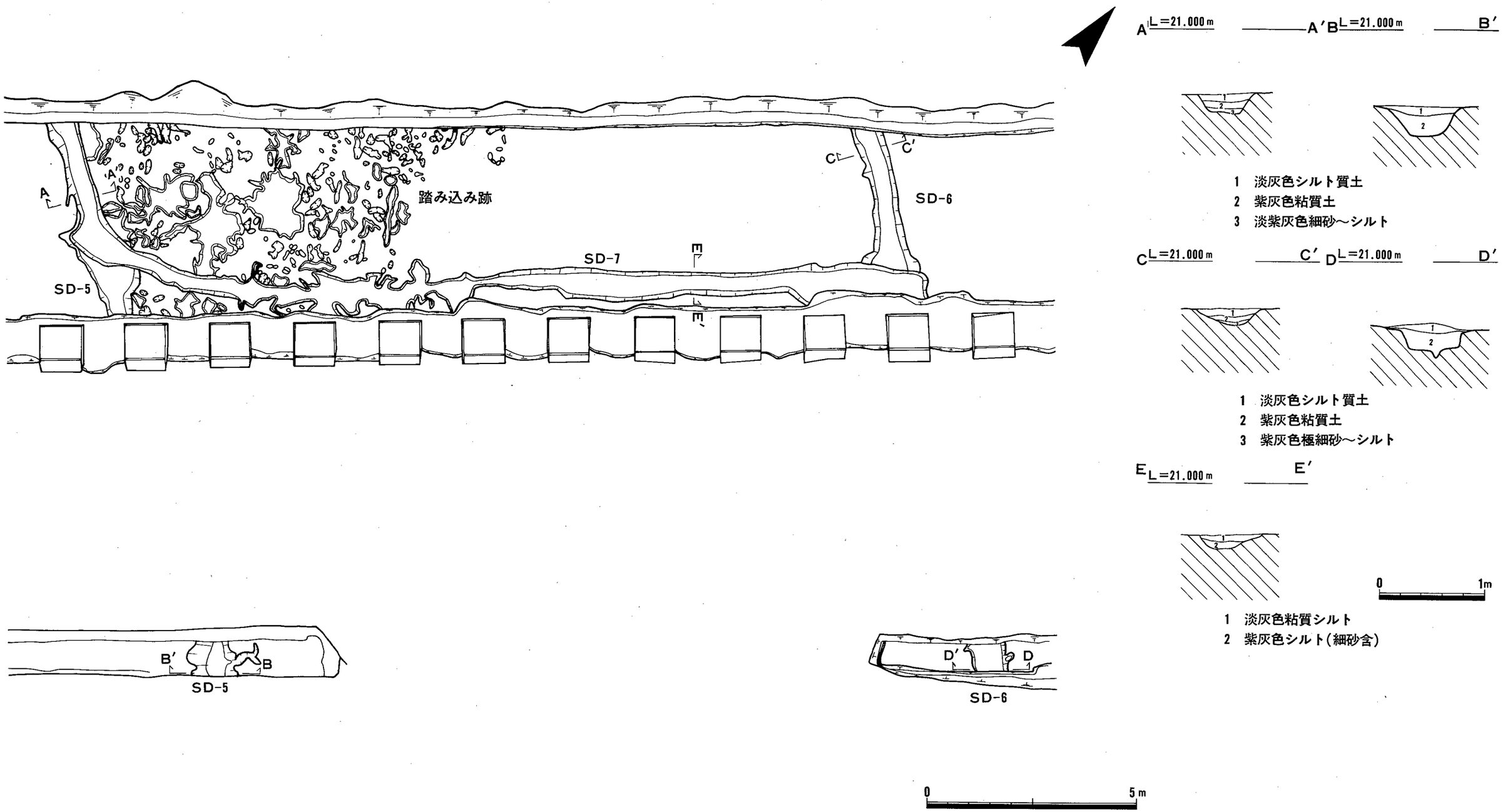


図13　SD－5，SD－6，SD－7，踏み込み跡

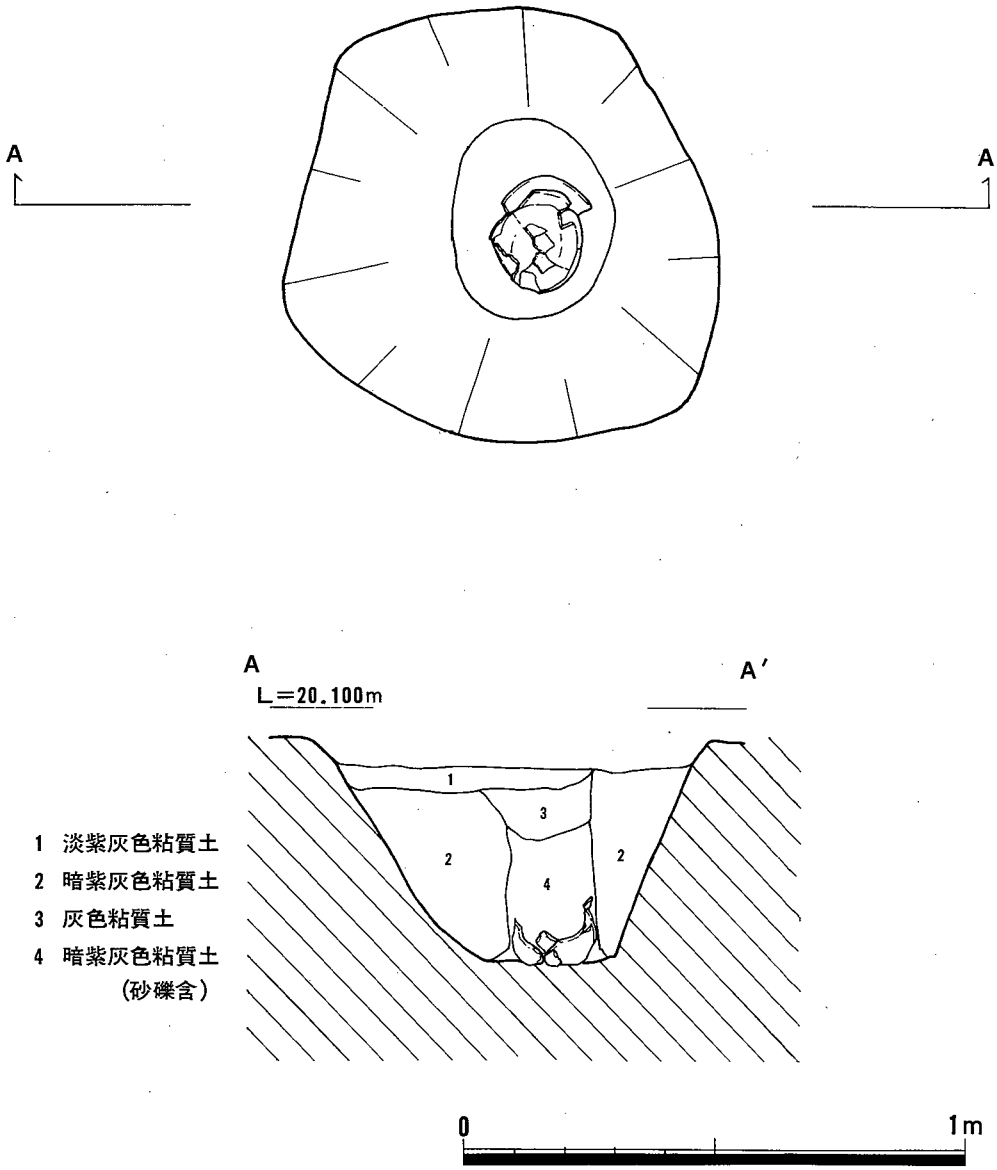


図14　Pit12

平城Ⅱ～Ⅲ期に比定できる土師器の甕、須恵器の杯、土師器の高杯などが出土している。

Pit群（図15～16、図版5）

本遺構はD区で検出したが、いずれも建物の復元はできなかった。おそらく調査区外にのびるものと考えられる。

ピット2と3はおそらく同一建物と思われるが、いずれも掘方は径27～28cmの円形で、

深さ約18cmを測り、埋土は紫灰色砂礫混粘土である。柱穴は径16～19cmで、深さは約18cmを測り、埋土は淡紫灰色粘土である。両柱穴間の長さは約１ｍである。ピット７、８、10はいずれも平面プランは掘方が径50cm～径70cmの隅丸方形、柱穴が径18cm～径35cmの円形を呈している。深さはピット７と10が約45～50cmと深く、ピット８は約20cm前後である。遺物は土師器、須恵器が出土している。

踏み込み跡（図13、図版５）

本遺構はＡ－Ｇ・Ｈ－５・６区で、ＳＤ－５とＳＤ－７の付近に集中して検出した。径10cm～70cm前後の不整形の落ち込みが固まっており、深さも２cmから深い部分では約10cmと一様でない。埋土は紫灰色粘土である。各落ち込みの中には人間の足跡と思えるものがあり、本遺構はおそらく人間の踏み込み痕と考えて良いであろう。

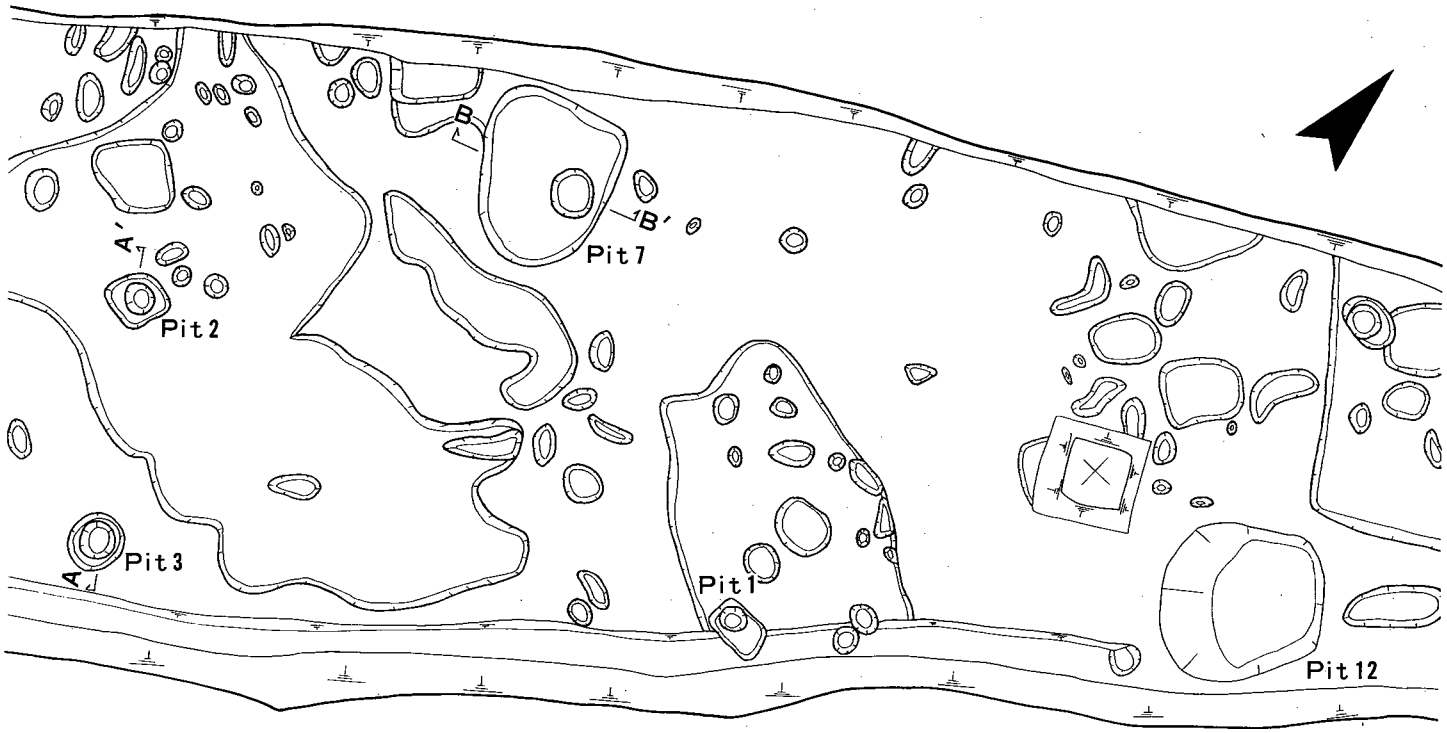
第２区

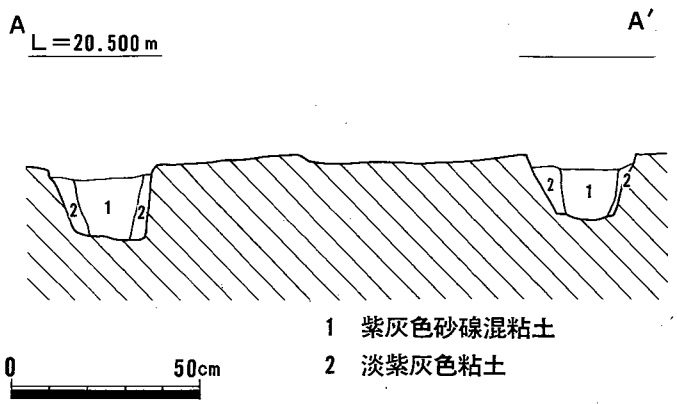
第４層上面検出遺構（図８）

鋤溝群

本遺構はＥ、Ｆ、Ｇ、Ｈ区全域で検出した。Ｅ区では東西方向の鋤溝は北に30°振ったものを約15本、北に40°振ったものを約35本検出した。前者は調査区の東側Ｅ－Ｏ・Ｐ－12・13区に集中している。南北方向の鋤溝は西に50°振って約10本を検出した。Ｆ区では西へ35°振った南北方向の鋤溝と北へ15°振った東西方向の鋤溝の一群、西へ45°振った南北方向の鋤溝と北へ40°振った東西方向の鋤溝の一群を検出した。おもに前者は調査区の西側、後者は調査区の東側に集中している。前者は南北方向に約17本、東西方向に約15本、後者は南北方向に約４本、東西方向に約５本を検出した。遺構の切りあいにより、東西方向の鋤溝が南北のものより新しい。Ｇ区では北へ60°振った鋤溝を約７本検出した。Ｈ区では北へ60°振った東西方向の鋤溝を約200本、西へ25°振った南北方向の鋤溝を約25本検出した。Ｈ区では鋤溝が集中しており、この付近では何度も繰り返し耕作が行われていたと考えられる。いずれも幅15～50cmで、深さは約２～３cmと浅く、埋土は灰色砂質土（第３層）である。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土している。

第５層上面検出遺構（図８）


Pit 7
Pit 2
Pit 3
Pit 1
Pit 12
A
A′
B
B′
0
1m


A
L＝20.500m
A′
1
2
0
50cm
1 紫灰色砂礫混粘土
2 淡紫灰色粘土

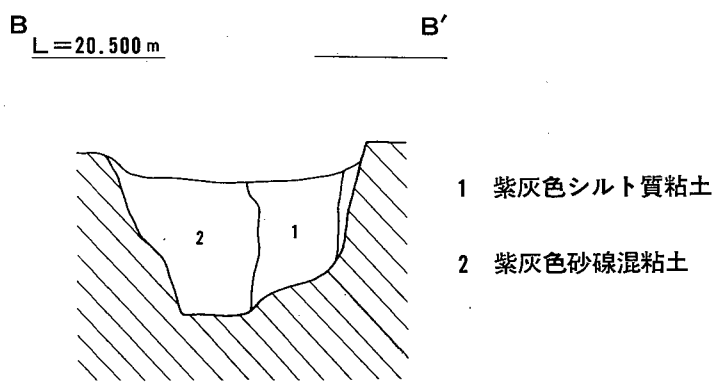

B
L＝20.500m
B′
1
2
1 紫灰色シルト質粘土
2 紫灰色砂礫混粘土

図15　D区 Pit群

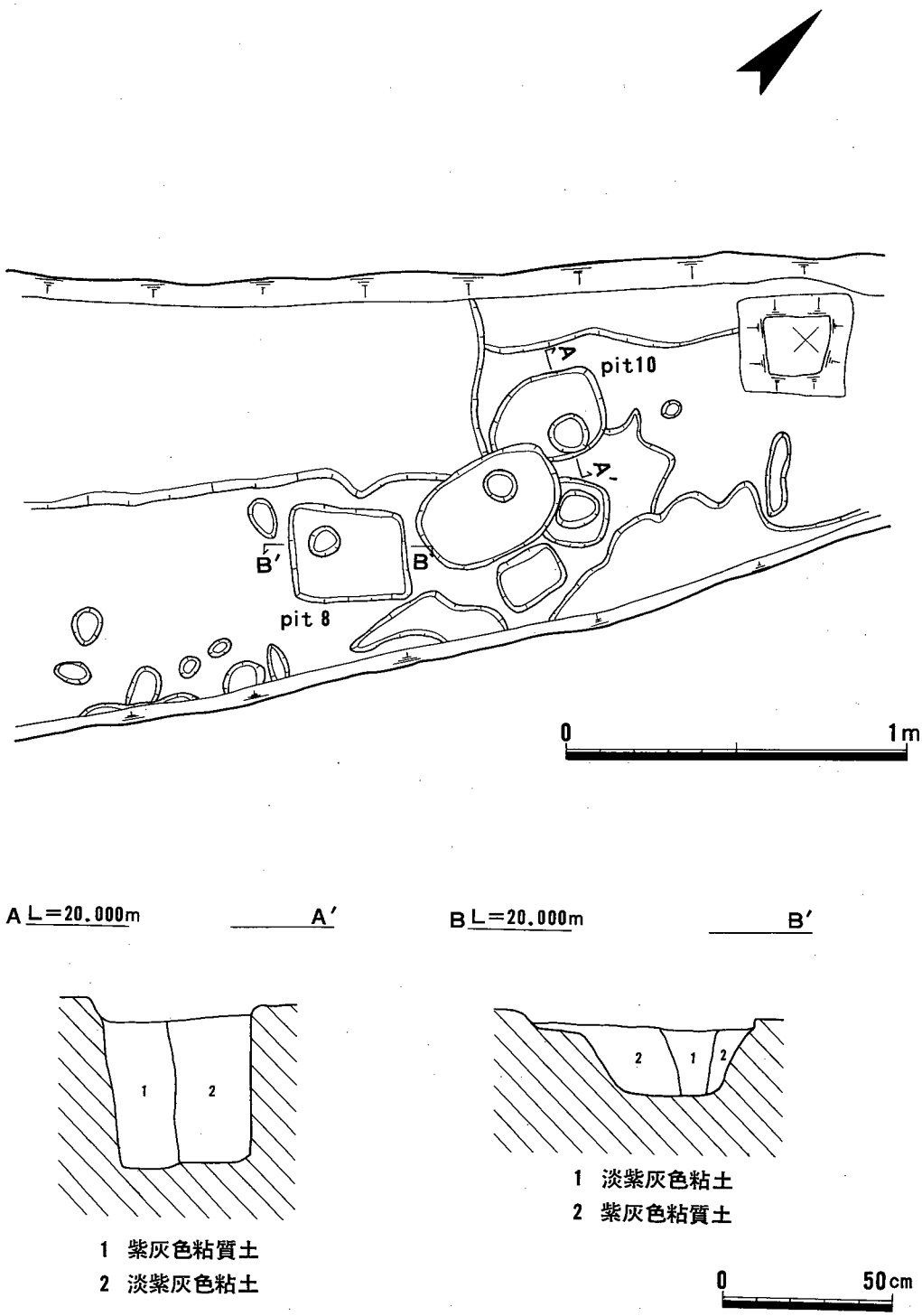

pit10
pit 8
A
A'
B
B'
0
1m
A L=20.000m
A'
B L=20.000m
B'
1
2
1 紫灰色粘質土
2 淡紫灰色粘土
1 淡紫灰色粘土
2 紫灰色粘質土
0
50cm

図16　D区 Pit群

鋤溝群

本遺構はE、F、G、H区全域で検出した。E区では南北方向の鋤溝が西へ50°振ったものを11本、西へ60°振ったものを10本検出した。前者は調査区の東側に集中している。東西方向の鋤溝は北へ40°振ったものを約65本検出した。F区では西へ40°振って南北方向の鋤溝を40本、北へ15°振って東西方向の鋤溝を約10本検出した。G区では西へ70°振って南北方向に3本、北へ60°振って東西方向に7本の鋤溝を検出した。H区では西へ約40°振って南北方向に約20本、北へ約50～60°振って東西方向に約180本を検出した。H区からG区にかけては、東西方向の鋤溝がゆるやかにカーブを描いている。おそらく地形的な制約によるものと思われる。鋤溝はいずれも幅15～50cmで、深さは約2～3cmと浅く、オリーブ灰色砂質土（第4層）を埋土とする。各区とも南北方向と東西方向の鋤溝は切り合い関係により、前者が後者より新しいと考えられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土している。

第6層検出遺構（図9）

鋤溝群

本遺構はE－R～W－16～19区で検出した。鋤溝は南北方向に西へ40°振ったものを約25本、東西方向に北へ50°振ったものを約40本、またほぼ東西に約5本、ほぼ南北に約10本を検出した。いずれも幅15～40cmで、深さは約2～3cmと浅く、淡灰色シルト質土（第5層）を埋土とする。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土している。

地山検出遺構（図9）

鋤溝群

本遺構はE、F、G、H区で検出した。E区では西へ40°振って南北方向に約10本、北へ40°振って東西方向に約45本を検出した。F区では西へ40°振って南北方向に約25本、北へ20°振って東西方向に約35本を検出した。G区では西へ40°振って南北方向に約5本、北に65°振って約8本を検出した。H区では西へ45°振って南北方向に約25本、北へ50～60°振って約160本を検出した。本遺構はおそらく第6層の上面から掘り込まれたものと思われるが、第6層は一部にしか存在しておらず、したがって第6層の堆積していない部分では地山で検出されたものと思われる。各区とも遺構の切り合い関係は南北方向の鋤溝の方が東西方向の鋤溝より新しい。いずれも幅15～10cmで、深さは約2～3cmと浅く、

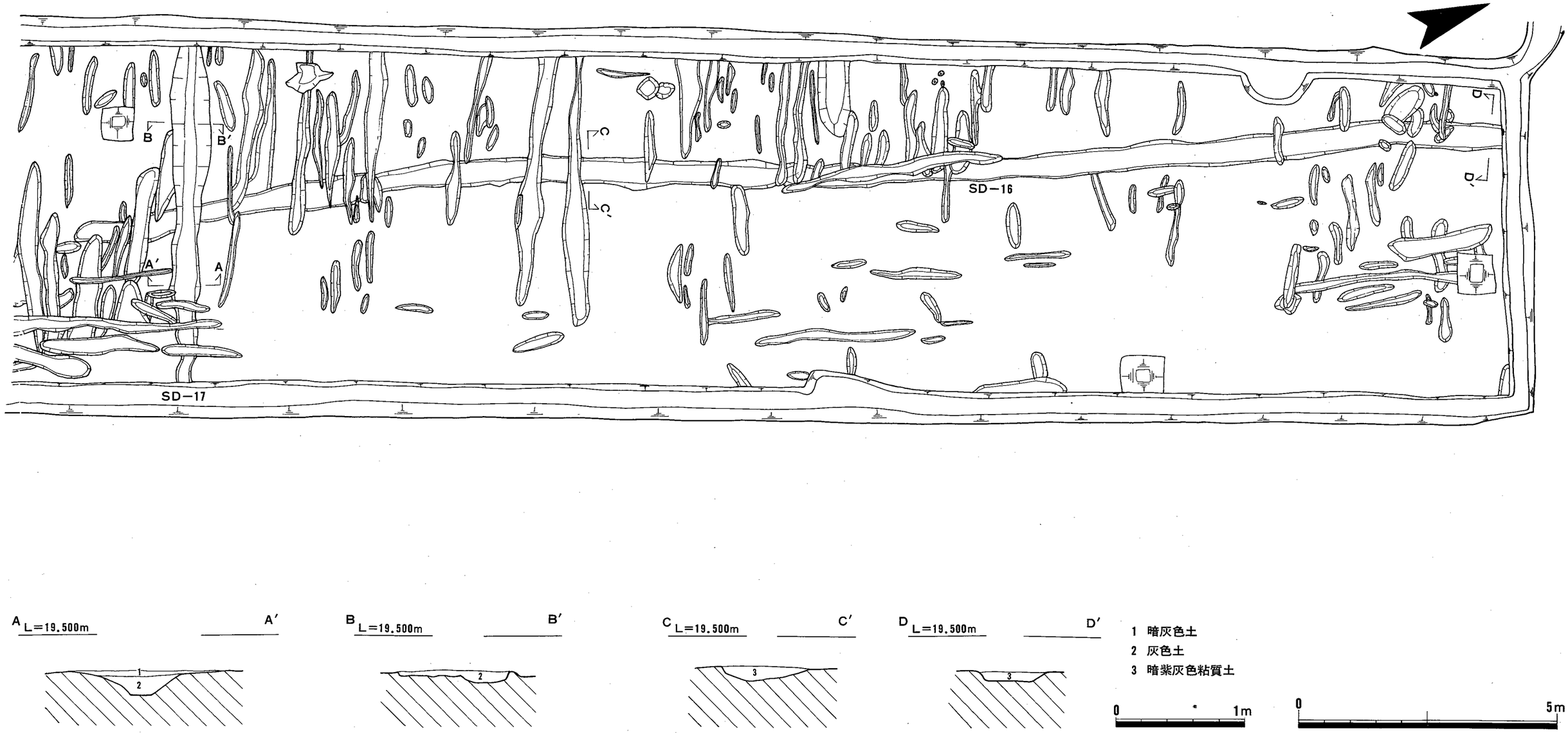


図17　SD−16，SD−17

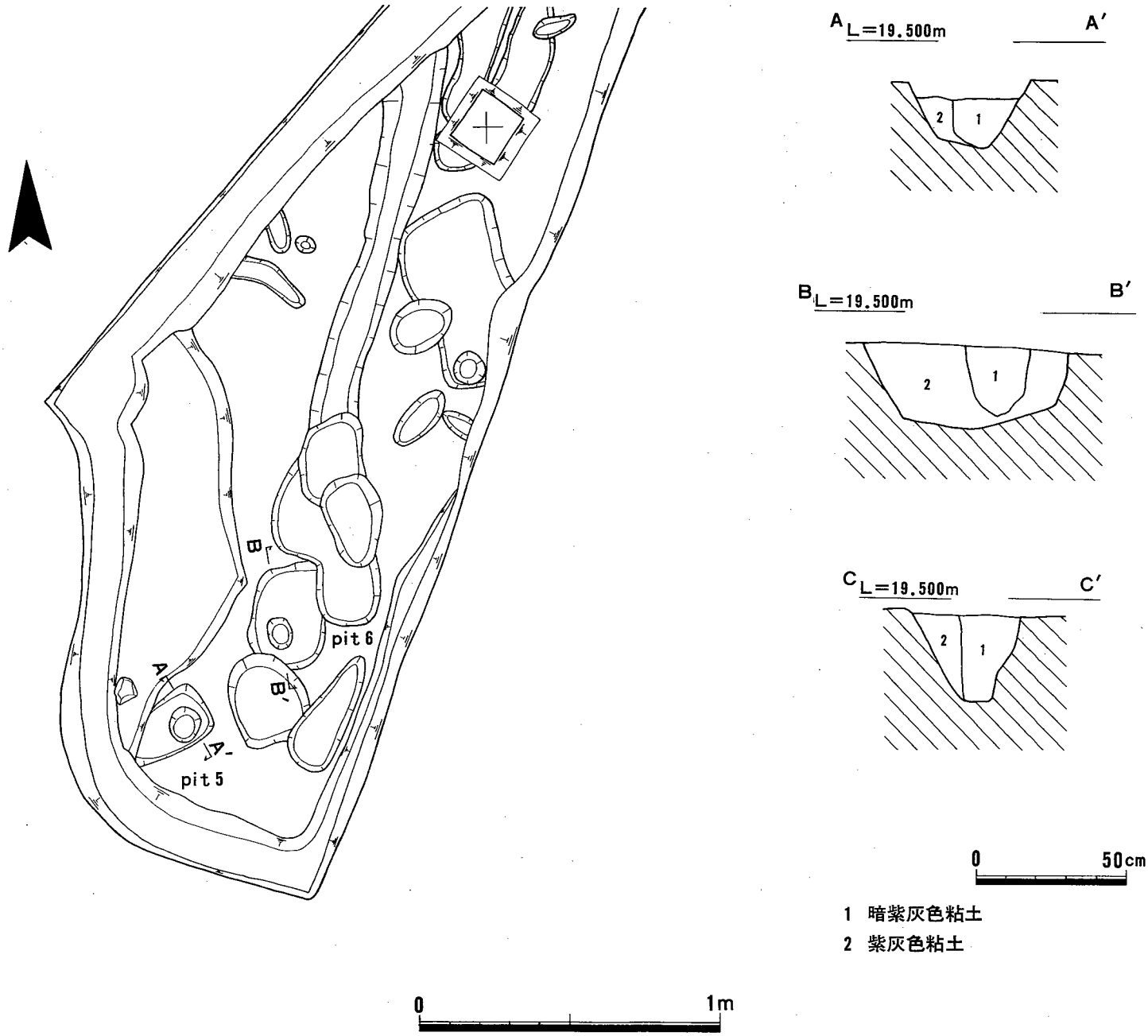

A L=19.500m A′
2
1
B L=19.500m B′
2
1
C L=19.500m C′
2
1
0 50cm
1 暗紫灰色粘土
2 紫灰色粘土
pit 6
pit 5
A
A′
B
B′
0 1m

図18　G区 Pit群

淡灰色シルト質土（第5層）を埋土とする。遺物は土師器、須恵器、瓦器などが出土している。

ＳＤ－16（図17、図版９）

本遺構はＨ－Ｄ～Ｆ－26～30区で検出した溝である。北に約40°振って、やや蛇行しながら北東～南西方向にのび、Ｅ－Ｆ－30区付近で途切れている。幅は0.5～0.6ｍで深さは約0.1ｍと浅く、レンズ状に掘り込まれている。本溝は南西から北東に向かって流れていたようである。埋土は紫灰色粘土である。

ＳＤ－17(図17、図版10)

本遺構はＨ－Ｆ－29・30区で検出した溝である。西に約50°振って北西～南東方向にのびている。幅0.4～0.6ｍ、深さ0.15～0.2ｍで、断面はレンズ状に堆積している。本溝は南東から北西に向かって流れていたようである。埋土は紫灰色粘質土である。

ＳＤ－18(図版10)

本遺構はＨ－Ｇ－40区で検出した溝である。ゆるやかにカーブを描きながらほぼ南北にのびている。幅0.3～0.6ｍ 深さ約0.1ｍで、断面はレンズ状に堆積している。本溝は南から北にかけて流れていたようである。埋土は暗灰色粘質土である。

Ｐｉｔ群（図18)

本遺構はＧ－Ｃ－25区で検出した柱穴群である。調査区の規模が小さく、各柱穴とも建物としては調査区外にのびると思われ、復元することはできなかった。いずれのピットも掘方は隅丸方形、柱穴は円形を呈している。各々の規模はピット５が掘方径35㎝、柱穴径22㎝、深さ約20㎝、ピット６が掘方径69㎝、柱穴径21㎝、深さ約28㎝、ピット８は掘方径37㎝、柱穴径21㎝、深さ約30㎝を測る。埋土はいずれも掘方が紫灰色粘土、柱穴は暗紫灰色粘土である。

踏み込み跡

本遺構はＥ－Ｖ・Ｗ－19・20区で検出した。径約10～20㎝の不整形の落ち込みが集中しており、深さも５㎝前後である。埋土は紫灰色粘質土である。本遺構は規模や検出状況な

どがA区で検出された踏み込み跡と酷似している。そのため、本遺構の性格も同じ人間の踏み込み痕と考えられる。

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は主に奈良時代から中世にかけての遺物である。遺物は包含層、各上面検出遺構ともに多くの遺物が出土しているが、遺構から出土した遺物は破片が多く図示し得ないものが多かった。その中で、ピット12出土の遺物は良好な一括資料として評価できる。

Ｐｉｔ 12

1は土師器の甕である。口径15.6㎝、高さ13.6㎝を測る。体部は球形をなし、最大径は½のところで、15.8㎝を測る。口縁はゆるやかに外反し、端部を丸く仕上げる。外面にはハケメを施している。ハケメは内面にも施していたと思われるが、磨耗のため残っていなかった。

2は土師器の高杯である。径15.4㎝に復元できる。内外面はナデによって成形し、口縁端部を肥厚させる。内外面には暗文等を施していたと考えられるが、磨耗により残ってい

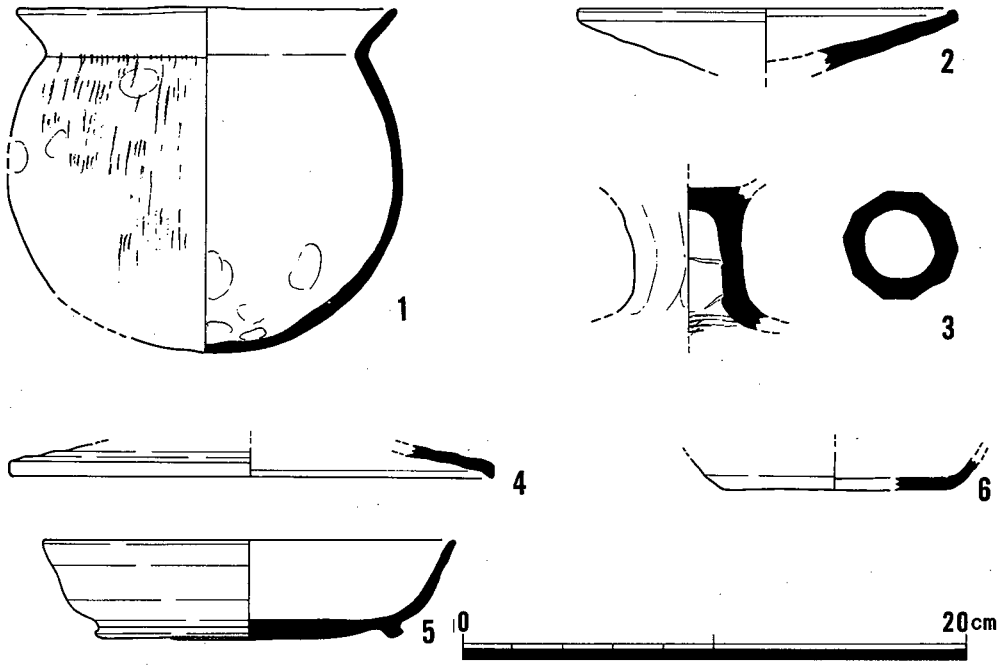


図19 Ｐｉｔ12出土土器

なかった。胎土は良好な土を用いている。

3は土師器高杯の脚部である。径約4.6㎝を測る。粘土紐を巻き上げて成形し、杯部と接合している。内外面とも粗くナデて、外面には面取りを施している。内面の下部には4～5本のハケメを横方向に施している。胎土は良好な土を用いている。

4は須恵器の杯蓋である。口径19.4㎝に復元できる。内外面は回転ナデによって成形する。全体に扁平で、口縁端部を下方へ屈曲させている。

5・6は須恵器の杯身である。5は口径16.4㎝、高さ3.9㎝を測る。内外面を回転ナデによって成形し、端部は丸く仕上げている。底部やや内側には断面台形の高台をハの字状に貼りつける。6は口縁部を欠いているが、底部径は9.2㎝に復元できる。内外面は回転ナデによって成形している。いずれも胎土は細かい砂粒を含みやや粗い感じがするが、精良な土を用いている。

Ｐｉｔ７（図20）

7は須恵器の皿である。口径23㎝に復元できる。口縁はハの字状に外反し、内外面を回転ナデによって成形する。胎土は精良だが砂粒を含むやや粗い感じの土を用いている。

8は須恵器の杯である。口径14.8㎝に復元できる。口縁はやや直立気味に外反し、端部は丸く仕上げる。内外面は回転ナデによって成形している。胎土は精良だが砂粒を含むやや粗い感じの土を用いている。

Ｐｉｔ16（図20、図版11）

9は須恵器の瓶である。口縁部、底部を欠いているが、胴部最大径は9.8㎝に復元できる。内外面は回転ナデによって成形しており、胴部最大径の部分には2条の沈線が巡り、穿孔がなされている。穿孔部分には粘土帯を貼りつけて外側に突出させている。

焼成は良好で、胎土は精良な土を用いている。

ＳＤ－１、ＳＤ－３（図21）

10は瓦器小皿である。口縁は9.2㎝を測る。ゆるやかに内彎して立ち上がっている。内面にはナデ、口縁端部には一段の横ナデを施し、外面には指頭圧痕が残っている。調整は内面にミガキが施されている。

11は瓦器椀底部である。断面三角の高台を貼りつけ、高台径4.6㎝を測る。内外面はナ

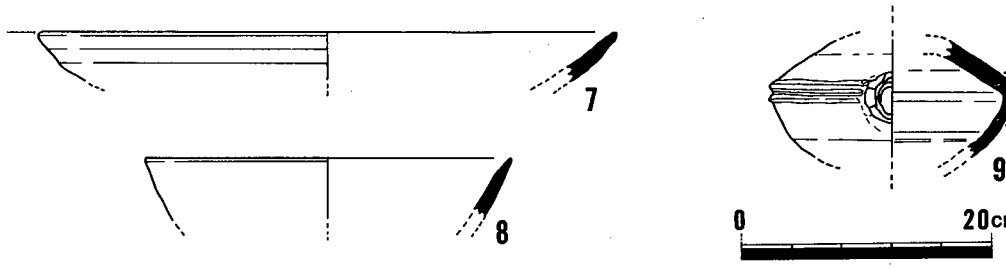


図20　Pit 7（7，8）Pit16（9）出土土器

デによって成形し、器壁は薄くつくられている。

12は土師器の小皿である。口径7.8cmを測る。内外面をナデによって成形し、口縁部は一段の横ナデを施してゆるやかに外反する。

第1区鋤溝（図22）

13は須恵器の杯である。口径17.2cmに復元できる。口縁は直立気味に外反して立ち上がり、端部は丸く仕上げる。内外面は回転ナデによって成形している。

14は須恵器の甕口縁部である。口径は13.8cmに復元できる。内外面を回転ナデによって成形し、口縁端部をつまみあげて立ち上がらせている。

15は須恵器平瓶である。口縁部、底部を欠いているが、肩部は径15.4cmに復元でき、するどく屈曲している。内外面は回転ナデによって成形している。

13・14・15はいずれも砂粒を少し含んだ精良な土を用いている。

16・17・18は瓦器椀である。16は底部のみで、断面三角形の高台を貼りつけている。高台径は4.8cmを測る。内面にはミガキを施し、外面には指頭圧痕が残っている。17は口径は9.6cmに復元できる。口縁は内彎気味にゆるやかに立ち上がり、端部に一段の横ナデを施す。内面はナデを施し、外面には指頭圧痕が残っている。18は口縁部で口径18.4cmに復元できる。口縁端部は横ナデを施している。内面にはミガキを施し、外面下部には指頭圧痕が残っている。

第2区鋤溝出土土器

19は土師器の羽釜である。口径30.6cmに復元できる。口縁は内傾し、端部を折り曲げて外反させる。横ナデによって成形しており、内面には指頭圧痕が残っている。

20は瓦器椀である。口径11.6cmに復元できる。口縁はゆるやかに外反し、内外面を横ナデによって成形する。調整は磨耗により不明である。

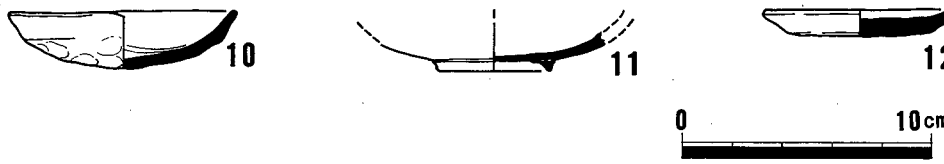


図21　SD－1(10,11),SD－3(12)出土土器

21は土師器の小皿である。口径7.2cmに復元できる。内面はナデ、外面は指頭圧痕の後ナデを施している。口縁はゆるやかに内彎し、口縁端部は横ナデによって立ち上がらせている。

包含層第6層（図24、図版12）

22～24は土師器である。

22は皿である。口径16.2cmに復元できる。内外面をナデによって成形し、口縁は内彎して立ち上がる。調整は磨耗のため不明である。

23は杯である。口径は18.8cmに復元できる。口縁はゆるやかに外反し端部を肥厚させている。内外面はナデにより成形し、おそらくミガキを施していたと思われるが、磨耗のため不明である。

24は甕の口縁部である。口径24.2cmに復元できる。内外面をナデによって成形し、口縁はハの字状に外反し、端部を四角く仕上げている。調整は磨耗のため不明である。

22・23・24はいずれも焼成は良好で、胎土は精良な土を用いている。

25～32は須恵器である。

25～27は杯である。25は口径12cm、高さ5.4cmを測る。口縁はやや直立気味に外反して立ち上がり、端部は丸く仕上げている。内外面は回転ナデによって成形し、底部やや内側に短い高台を貼りつけている。26は口縁部を欠くが、高台径は9.6cmに復元できる。内外面は回転ナデによって成形し、外面½にヘラケズリを施している。高台はハの字状に外反して貼りつけている。27は底部で、径6.4cmに復元できる。内外面は回転ナデによって成形し、口縁はゆるやかに立ち上がっている。

28は甕口縁部である。口径13.4cmに復元できる。内外面を回転ナデによって成形し、ゆるやかにハの字状に外反させ、端部はさらに外反させている。

29・30は壷底部である。29は底部径11.8cm、30は底部径13cmに復元できる。いずれも内外面を回転ナデによって成形し、胴部は屈曲して、ハの字状に立ち上がっている。

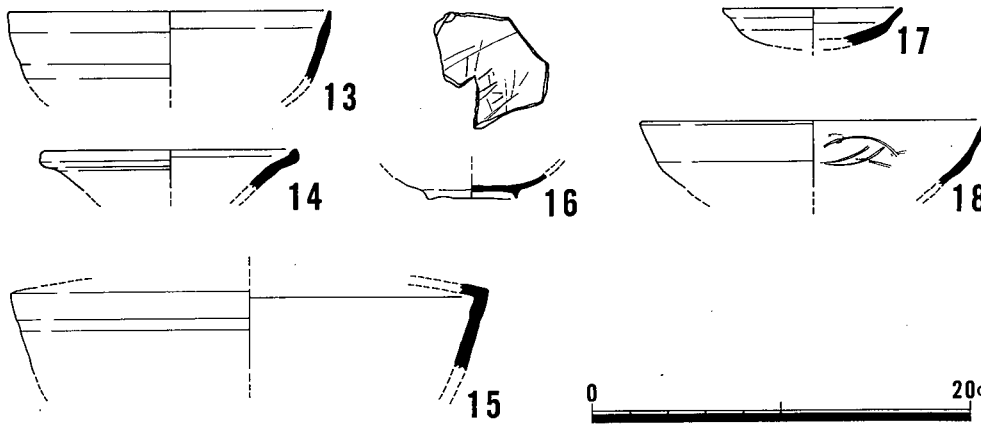


図22　第1区鋤溝出土土器

31は蓋のつまみ部分である。径4.2cm、高さ1.5cmを測る。回転ナデによって成形し、やや扁平な擬宝珠状を呈している。

32は平瓶である。肩部と把手部分の破片であるため、規模は復元できないが、内外面を回転ナデによって成形し、外面にはヘラケズリを施している。把手は粘土紐を上面と側面にヘラケズリを施して成形しており、内側は未調整である。

包含層第5層出土土器

33は製塩土器の脚部である。柱状部から裾部にかけてラッパ状に広がっている。底部の径6cmを測る。外面にはタタキを施し、裾端部には横ナデを施している。胎土は粗い砂粒を多く含んだ粗悪な土である。

34～40は須恵器である。

34・35は杯蓋である。34はつまみ部分で、内外面を回転ナデによって成形しており、扁平な擬宝珠状つまみを貼りつけている。つまみの径は2.2cmを測る。35は口径14cmに復元できる。内外面は回転ナデによって成形し、口縁端部を下方に屈曲させている。

36・37・38は杯身である。36は口径10.8cm、37は口径14.4cm、38は口径16.8cm高さ3.8cmに復元できる。いずれも内外面を回転ナデによって成形し、口縁はハの字状に外反して端部を丸く仕上げている。38は底部やや内側に扁平な高台を貼りつけている。

39は壷である。口縁と体部上部を欠いている。内外面は回転ナデによって成形し、底端部に高台をハの字に貼りつけている。

40は甕口縁部である。口径は42.4cmに復元できる。内外面を回転ナデによって成形し、

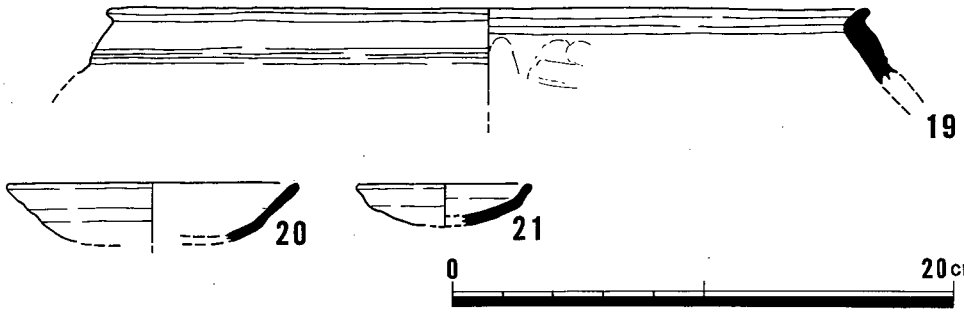


図23　第２区鋤溝出土土器

口縁はラッパ状に外反して、端部をつまみあげて立ち上がらせている。

これら須恵器はいずれも焼成は良好で、精良な土を用いている。

41～56は土師器である。

41は杯である。口径14cmに復元できる。口縁はハの字状に外反し、端部には一段の横ナデを施す。

42は皿である。口径19.8cmに復元できる。ナデによって成形し、口縁はハの字状に外反する。端部は削って面取りを施した後、ナデで形を整えている。

43は甕である。口径13.6cmに復元できる。全体はナデによって成形し、器壁は薄くつくられている。口縁はハの字状に外反し、端部は強いナデによって立ち上がらせている。外面にはハケメを施している。

41・42・43はいずれも精良な土を用い、堅致なつくりをしている。

44・45は椀の底部である。44は高台径4.8cm、45は高台径5.6cmに復元できる。いずれも器壁は薄くつくられ、断面三角形の高台を貼り付けている。内面にはナデを施し、外面には指頭圧痕が残っている。調整は磨耗により不明である。

46～56は小皿である。口径はいずれも７～10cm前後を測る。これらはその形状から大きく３つのタイプに分けられる。a.器高が1.5～２cmと比較的高く、口縁が内彎するもの（46～48）、b.器高は１cm前後で、口縁部が底部より明確な稜をもって外反するもの（49～54）、c.器高は１cm前後で、口縁部が底部より明確な稜をもたずにゆるやかに外反するもの（55～56）の３タイプである。いずれも一段のナデを施して、端部を丸く仕上げている。

57～61は瓦器である。

57・58・59は椀である。いずれも底部を欠いているが、口径は57が10.4cm、58が12.4cm

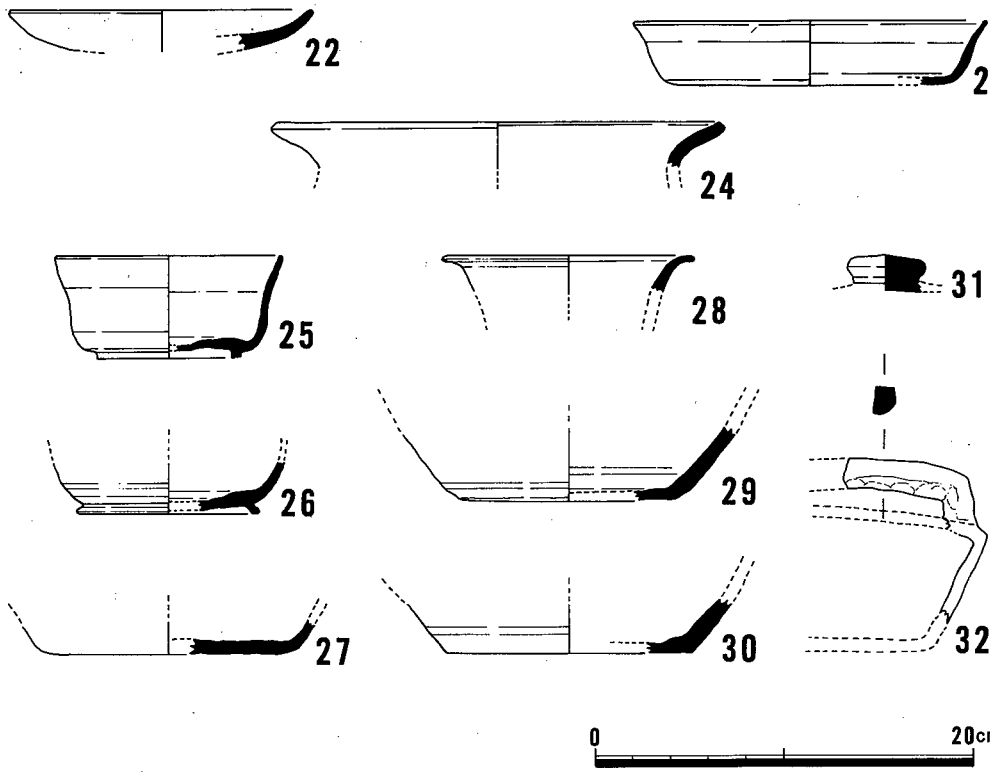


図24　包含層第6層出土土器

59が14.8cmを測る。口縁は内彎し、内外面をナデによって成形している。調整は57・58は残っていないが、59は内面にミガキが施され、外面には指頭圧痕を残している。

60・61は小皿である。60は口径9cm、高さ1.5cm、61は口径11cm、高さ1cmに復元できる。いずれも一段のナデを施し、口縁は底部より鋭く屈曲して外反する。調整は60の内面にミガキが施されており、底部外面には60・61ともに指頭圧痕が残っている。

62は青磁である。口径は15.8cmに復元できる。ややオリーブがかった青磁釉を内外面に施釉し、外面には片切り彫りの蓮華文を陰刻している。

63は白磁である。口径は18.2cmに復元できる。口縁はハの字状に外反し、端部は肥厚させ、玉縁状になっている。

包含層第4層出土土器

64～67は土師器の小皿である。口径が6.8～7.2cmで厚手のもの（64・65）と口径が8.2～8.4cmで比較的薄手のもの（66・67）の2タイプがある。いずれも口縁は一段ナデを

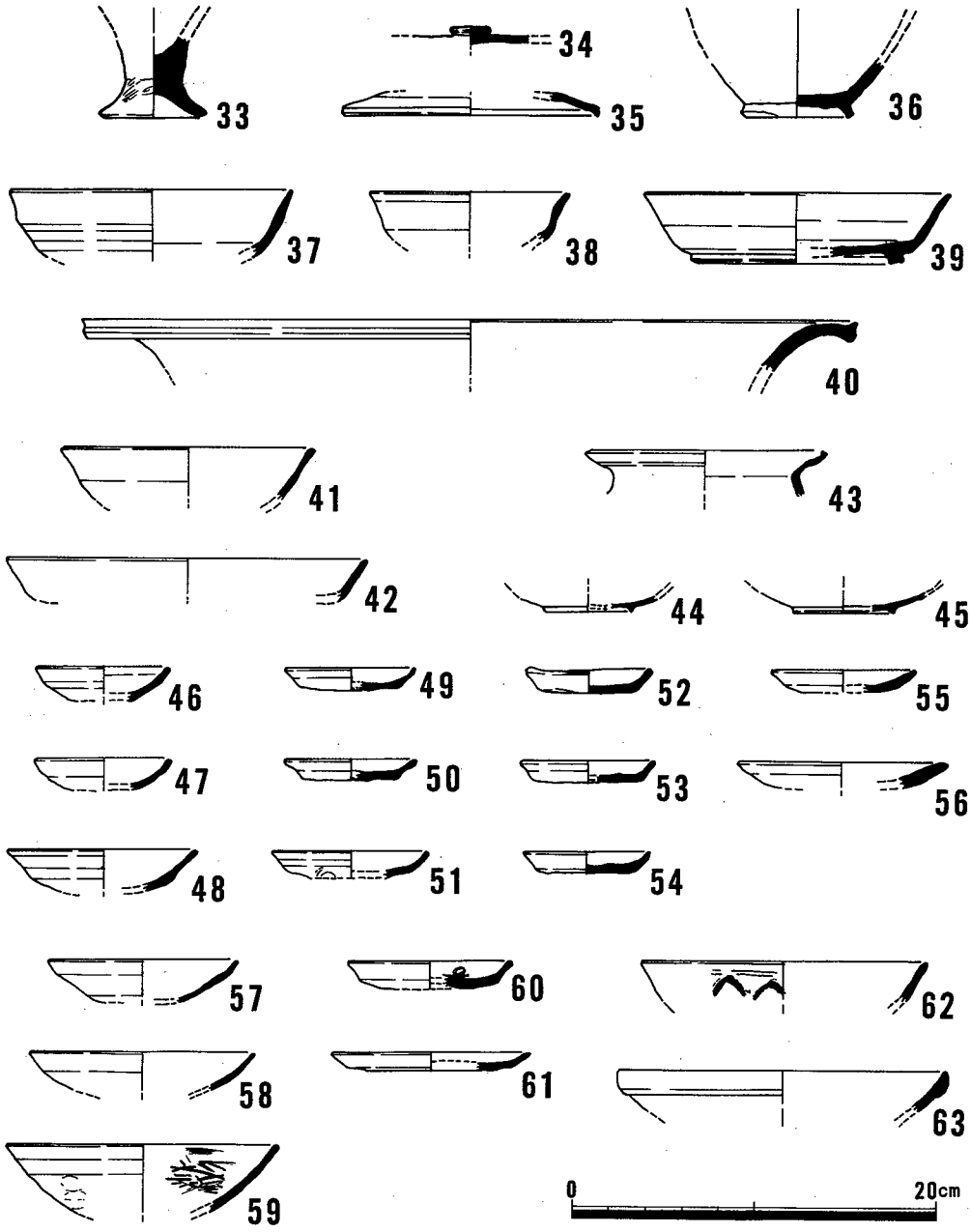


図25　包含層第5層出土土器

施し、底部より鋭く屈曲して外反している。底部は内外面ともにナデを施している。

68は須恵器の摺り鉢である。口径27cmに復元できる。内外面は回転ナデによって成形している。口縁はハの字に外反し、端部を折り込み肥厚させている。

69・70は瓦器椀である。69は口径11.2cmに復元できる。口縁は内彎し、ナデによって成

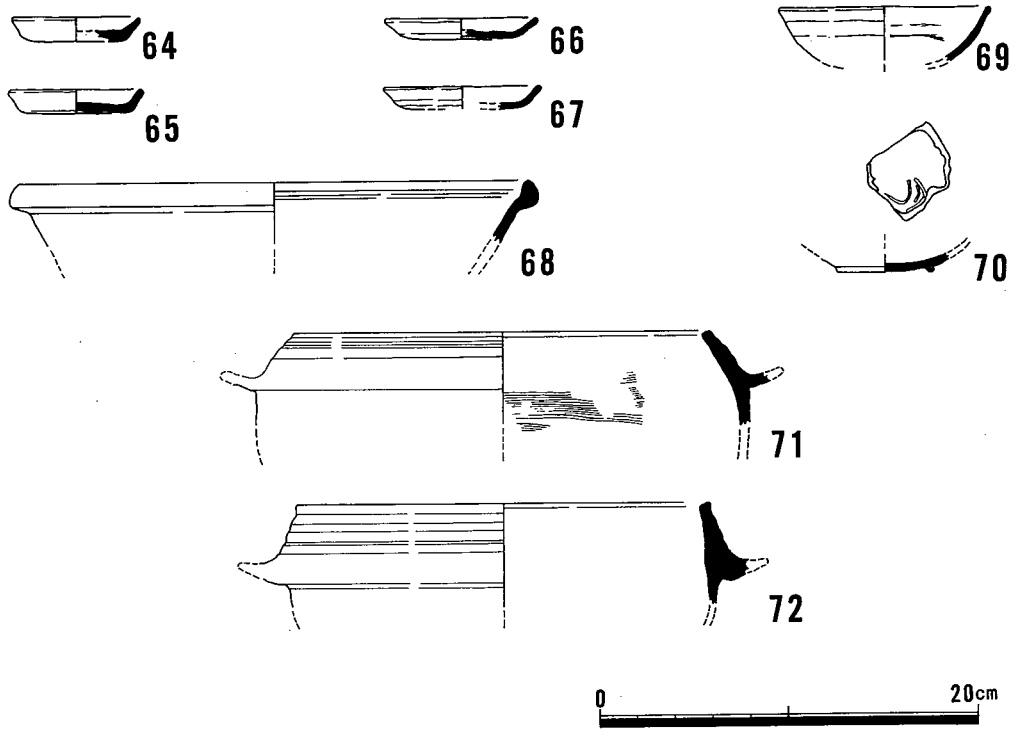


図26　包含層第4層出土土器

形している。70は底部で、高台径5㎝に復元できる。内外面には指頭圧痕が残っており、短い高台部を貼りつけている。いずれも内面にはミガキが施されている。

71・72は土師質の羽釜である。口径は71が22.2㎝、72が21.8㎝に復元できる。いずれも横ナデによって成形し、羽部は貼りつけている。71は口縁が内彎し、端部は四角く仕上げている。口縁外面には磨耗によりわかりにくいが、凹線が3条入っており、羽部の下の外面にはケズリを施している。内面には11～13本を1単位とするハケメを施している。72は口縁が直立し、端部を四角く仕上げる。外面には口縁部に凹線が3条入り、羽部の下にはケズリを施している。

石器

石器は剝片が3点、石鏃が1点出土している。73は踏み込み跡からの出土、他はいずれも包含層第6層からの出土である。

以下石器についてその概要を述べる。

73・74・75は剝片である。73は長さ3.5㎝、幅3.4㎝、厚さ0.7㎝を測る。74は長さ4.7

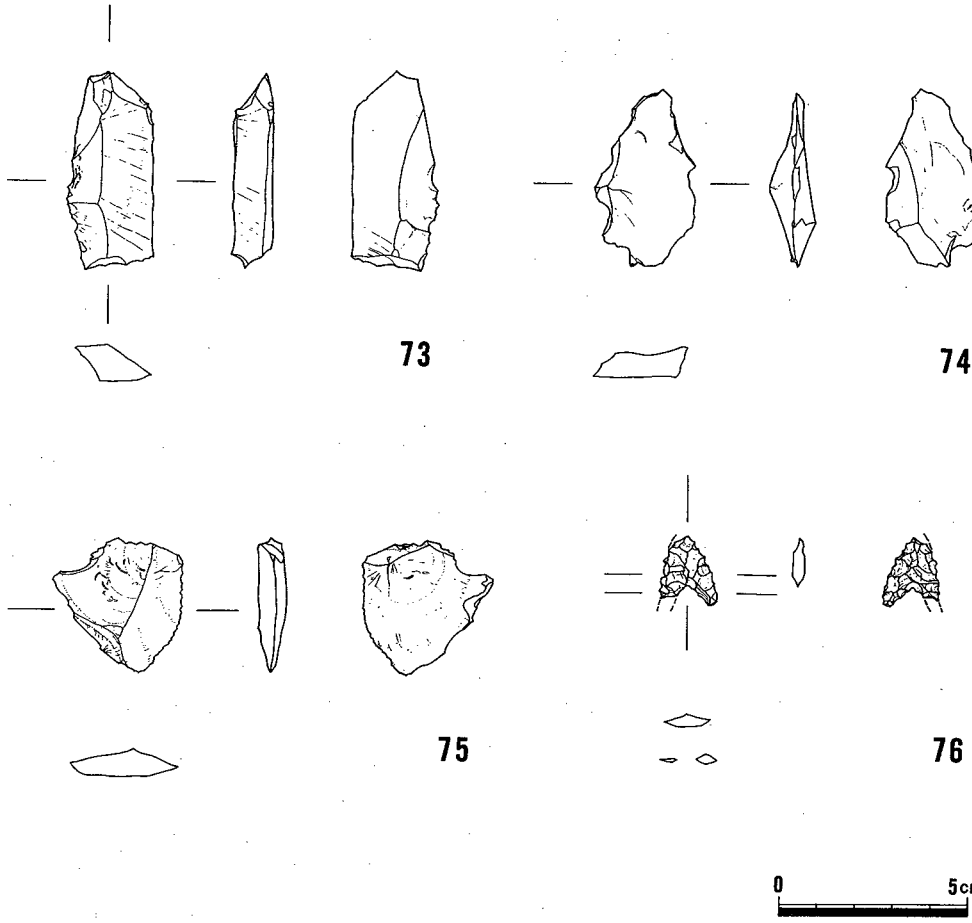


図27　踏み込み群(73),包含層第6層(74～76)出土石器

cm、幅2.7cm、厚さ1.3cmを測る。75は長さ5.2cm、幅2.3cm、厚さ1cmを測る。

76は石鏃である。長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。

いずれも石材はサヌカイトである。

第4章　まとめ

今回の調査は道路建設に伴うものであり、調査区の幅も狭く、数区に分断され、面的な調査ができなかった恨みがあるが、一定程度の成果は得た。したがってこれら調査の成果を検討していき、今回の調査のまとめとしたい。

今回遺構からの遺物の出土が少なく、遺構の時期の判別は難しいが、埋土の状態などから、大きく中世と奈良時代の2時期に分けられる。

奈良時代の遺構には柱穴群がある。またＳＤ－５・６・７、ＳＤ－216なども遺物の出土は破片のみの出土であったが、埋土の状態が柱穴群と酷似しており、同時期またはその前後のものと考えられる。これらはいずれも紫灰色粘土（第6層）を埋土としており、第6層の堆積する部分にのみ存在する。中世の遺構には各層上面の鋤溝群、ＳＤ－１・２・３・４などがある。

今回の調査で注目すべき成果は、おびただしい鋤溝群の検出である。これら鋤溝は各層に及んでいる。時期としては中世に固まっており、また、各層上面の鋤溝出土の土器にも目立った時期差が見られないことから、調査地周辺では中世以降、何度か土地を整備しながら連続して耕作を行っていたことがうかがえる。またこれら鋤溝群はその方向などの検討により、断片的ではあるが大きく４つのブロックに分けることができる。1.西に30～40°振った南北の鋤溝が主となるＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区、2.北に35～40°振った東西の鋤溝が主となるＥ区、3.北に15°振った東西の鋤溝もしくは西に30°振った南北の鋤溝が主となるＦ区、4.北に50～60°振った東西の鋤溝が主となるＧ・Ｈ区の４ブロックである。

これらは各層により、微妙にその角度も違ってくるが、だいたい同じような様相を呈している。いずれも西に36°振るという条里の方向とは異なっており、中世の段階には条里は残っていなかったことがうかがえる。

こうした鋤溝の方向の違いは何に由来するものであろうか。まず考えられるのは土地の区画による違いであるが、Ａ区の西側には断面Ｖ字を呈した溝ＳＤ－１が存在している。この溝はＡ区の西側からゆるやかにカーブを描いてＤ区の東側を通ると考えられるが、その規模と形状からも土地区画溝と考えられる。西側に曲がるのはおそらく地形的な制約によるものと思われる。しかしこのＳＤ－１が区画するＡ区とＤ区の方向は同じであり、必ずしも方向の違い＝土地の区画による違いとは言えないようである。また、Ｇ・Ｈ区の鋤

溝はゆるやかにカーブを描いており、これはおそらく地形の制約によるものだろうと思われる。

このように各鋤溝の方向はさまざまな理由によって異なってくると思われ、今の段階ではこれ以上のことは言えない。今後周辺の調査地との比較検討を行って、周辺の耕作地の復元をしていきたい。

また、今回の調査では柱穴も多く検出したが、いずれも建物の復元はできなかった。その中で、Ｐｉｔ 12からは最下層より奈良時代の遺物がまとまって出土している。遺物はほぼ中央、柱穴部分の最下層に土師器の高杯、須恵器の杯、その上に土師器の甕が埋まっていた。ピット12の埋土は掘方と柱穴の境がはっきりせず、全体的に埋め戻したような感じである。したがってこれら遺物は、建物の廃棄の際、柱を抜き取った後に埋められたと考えられる。残念ながらピット12とセットになる柱穴は見つからず、建物全体にこうした土器を埋めていたのか明らかではないが、遺物も高杯や杯など供膳具であり、おそらく建物廃棄時の何らかの祭祀の跡と考えて良いであろう。

遺物は縄文～近世の遺物が出土しているが、中でも奈良時代～中世のものが多く出土している。器種としては、椀、皿、小皿、杯、高杯などの供膳具、甕、羽釜などの煮沸具が多く、各時代とも日常の雑器がほとんどである。その中で製塩土器が包含層より出土したことは注目される。

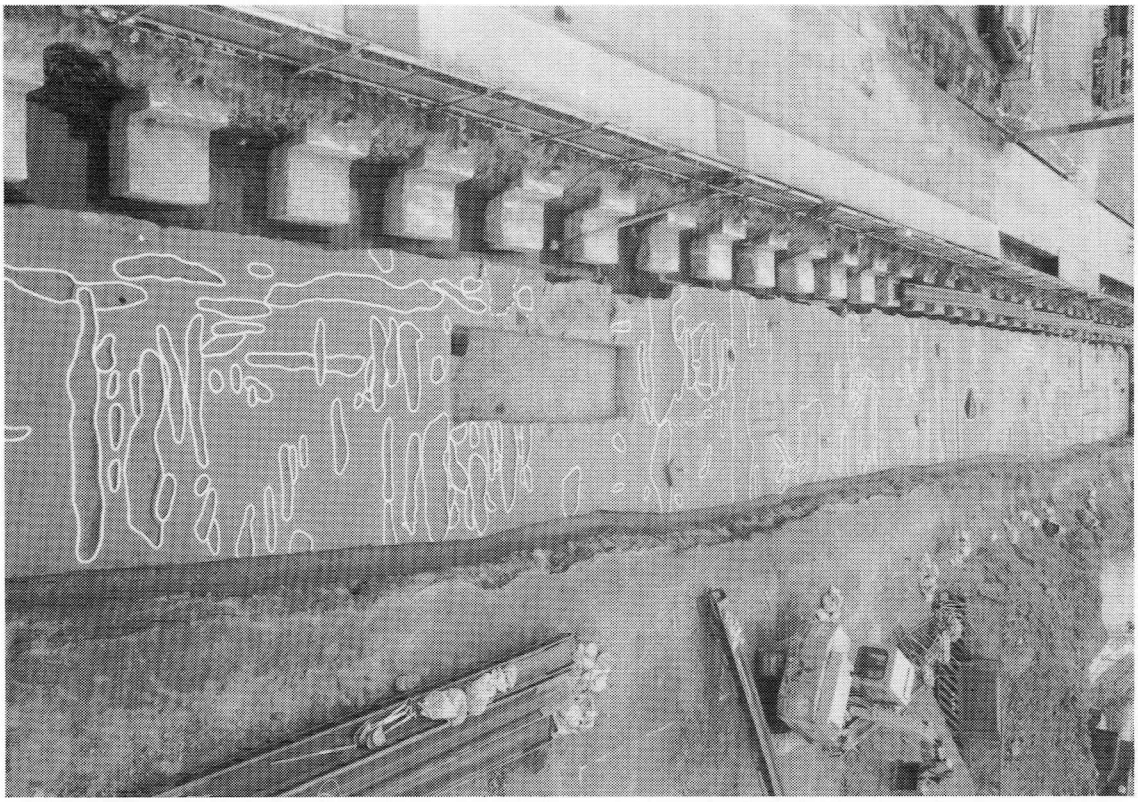
以上、今回の調査では奈良時代の集落と、中世の耕作地の存在が確認できた。奈良時代の集落については、調査区の東で掘立柱建物が検出されており、現在の市庁舎第１別館やコモ池の東側などでも奈良時代の遺構が確認されている。また調査地の南、市民文化会館建設に伴う調査では大型井戸が検出され、注目すべき結果となった。今回の調査を含め、調査区周辺の近年の開発に伴うこれらの調査結果により、奈良時代の集落は現在の市役所の東側、コモ池の周辺に広がっていると考えられる。

また中世の耕作地については、今回各包含層上面での調査を行なった結果、中世全期にわたって耕作が行われていたことが分かった。

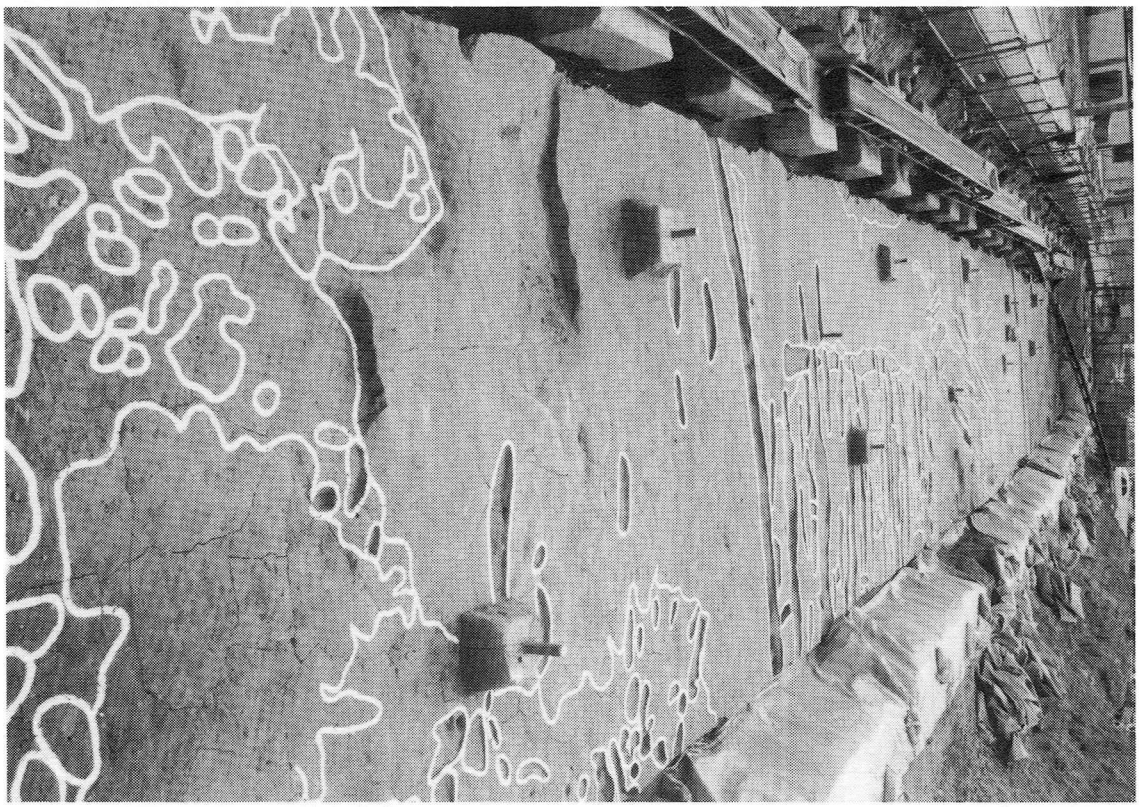
このように今回の調査は、当調査地周辺における各時期の様相を復元するにあたって、貴重な結果といえる。今後は各時代のより詳細な復元を行ない、集落から耕作地へ変化する過程などを含め、更に考察を深めていく必要があるだろう。

図　　版

図版1 検出遺構

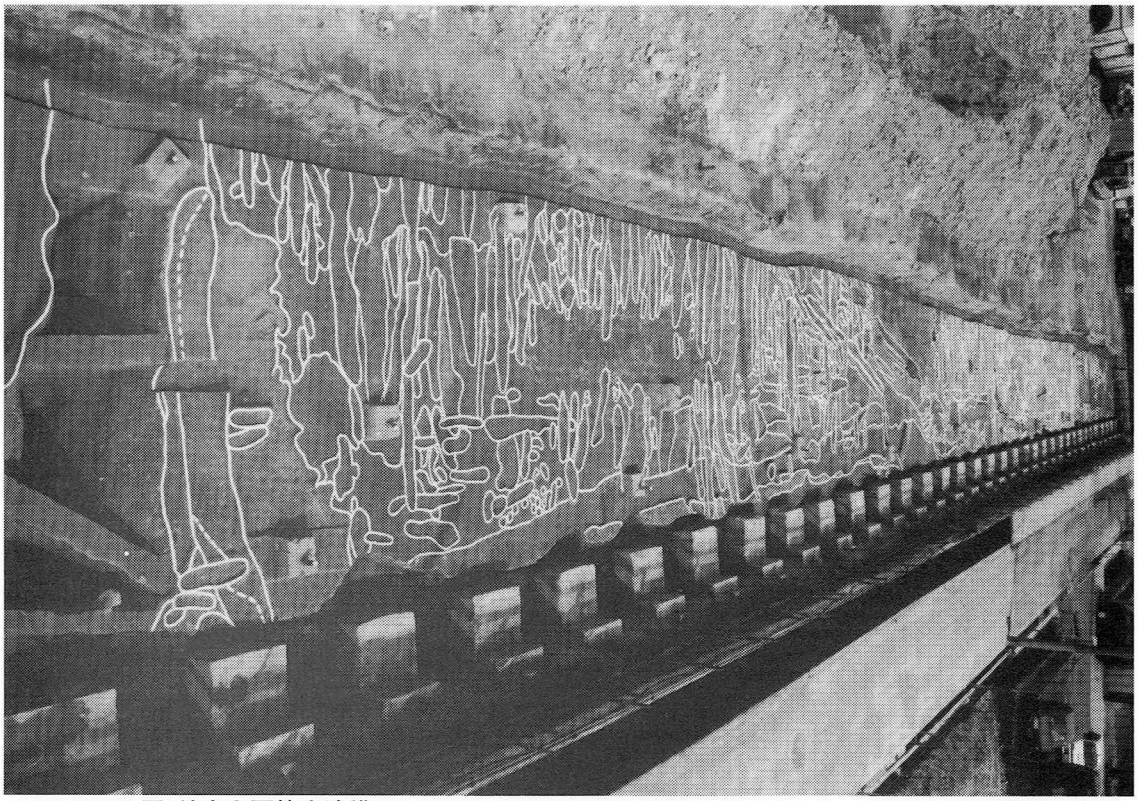


1．A区 第5層上面検出遺構　　南西より

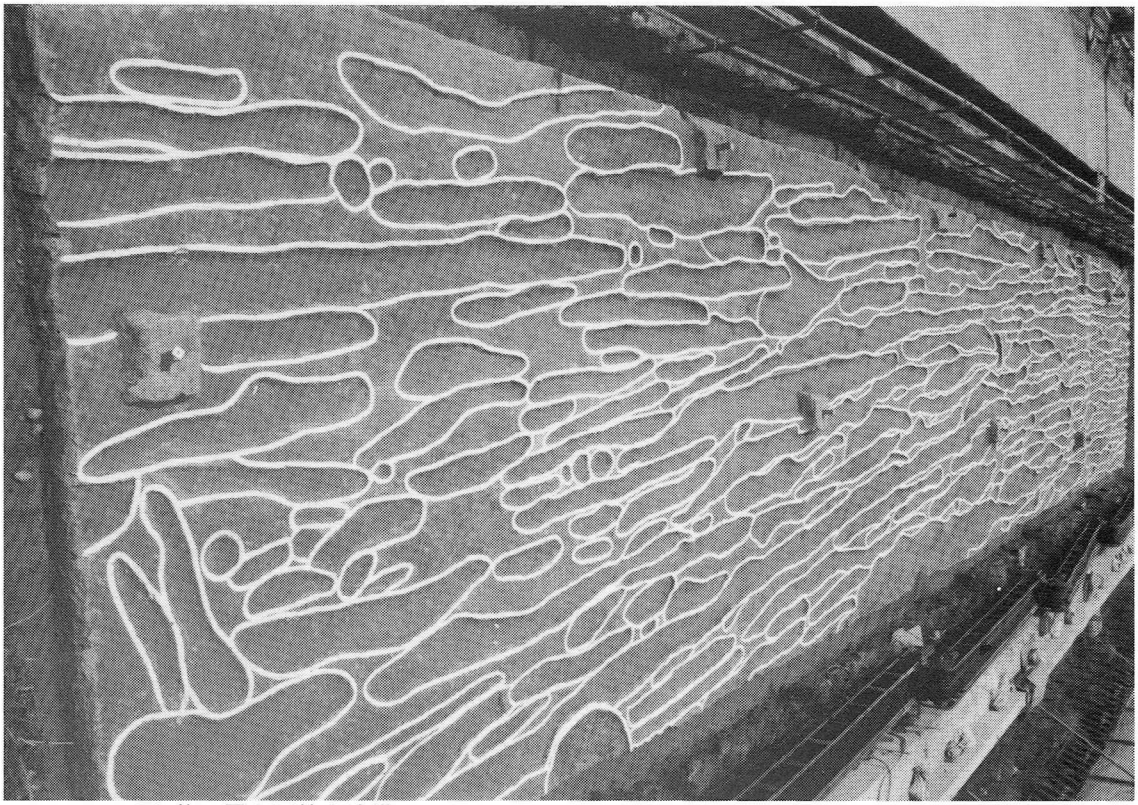


2．A区 第6層上面検出遺構　　南西より

図版2　検出遺構

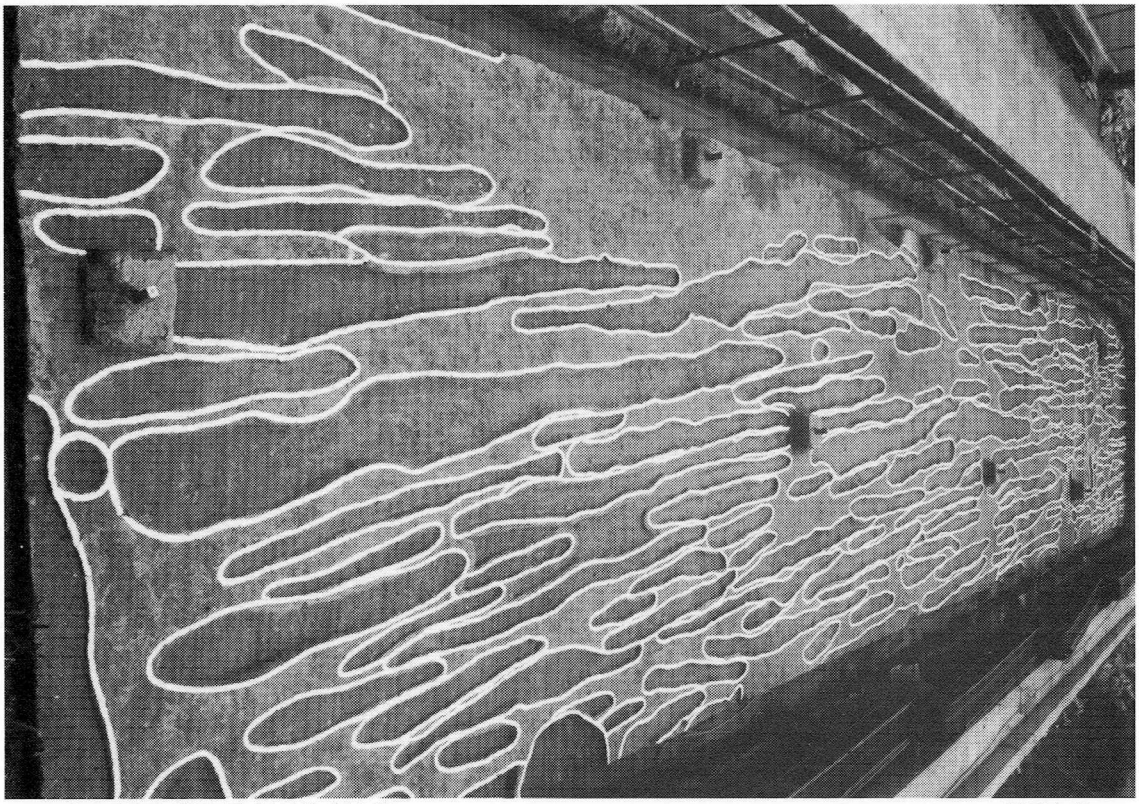


1．A区 地山上面検出遺構　　南西より

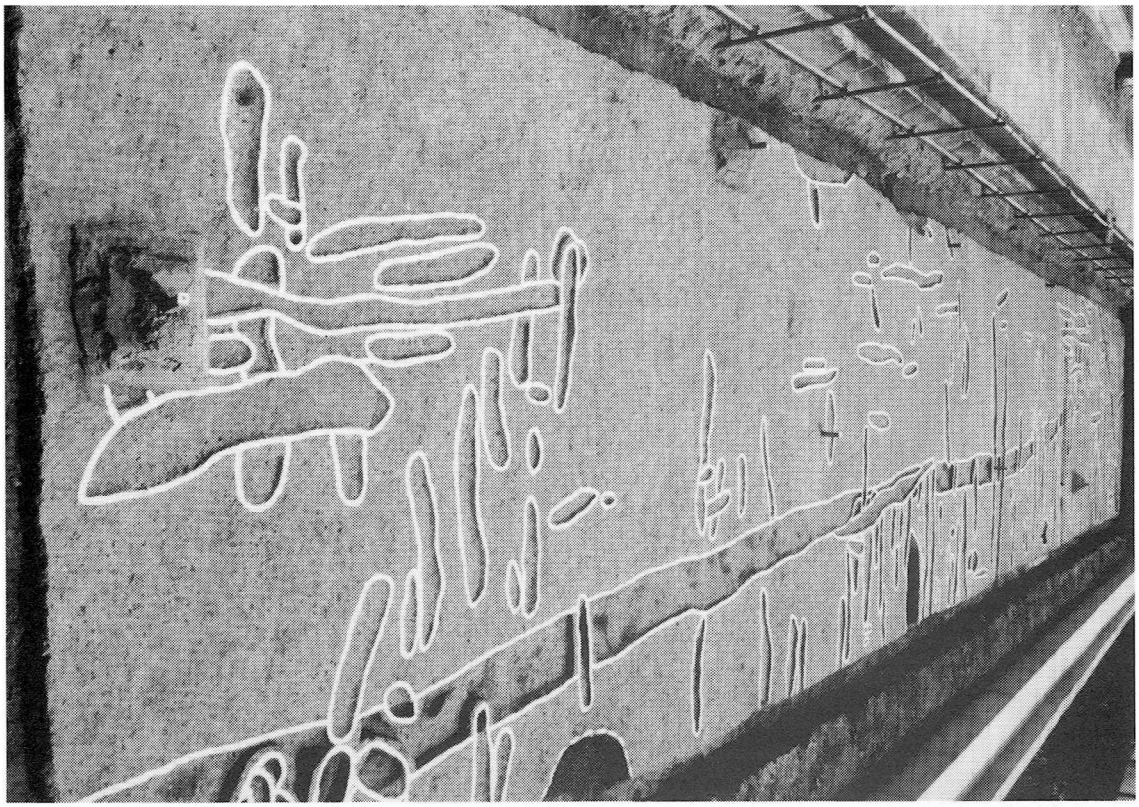


2．H区 第4層上面検出遺構　　南西より

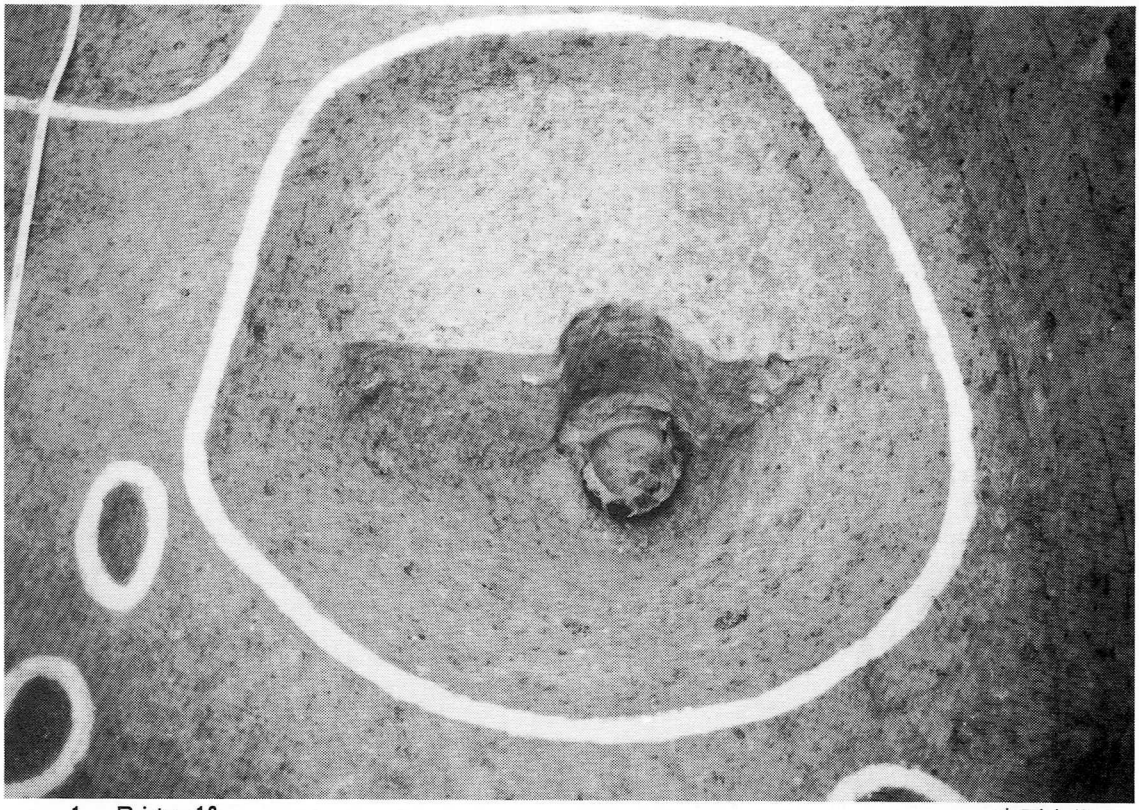
図版3　検出遺構



1．H区 第5層上面検出遺構　　南西より



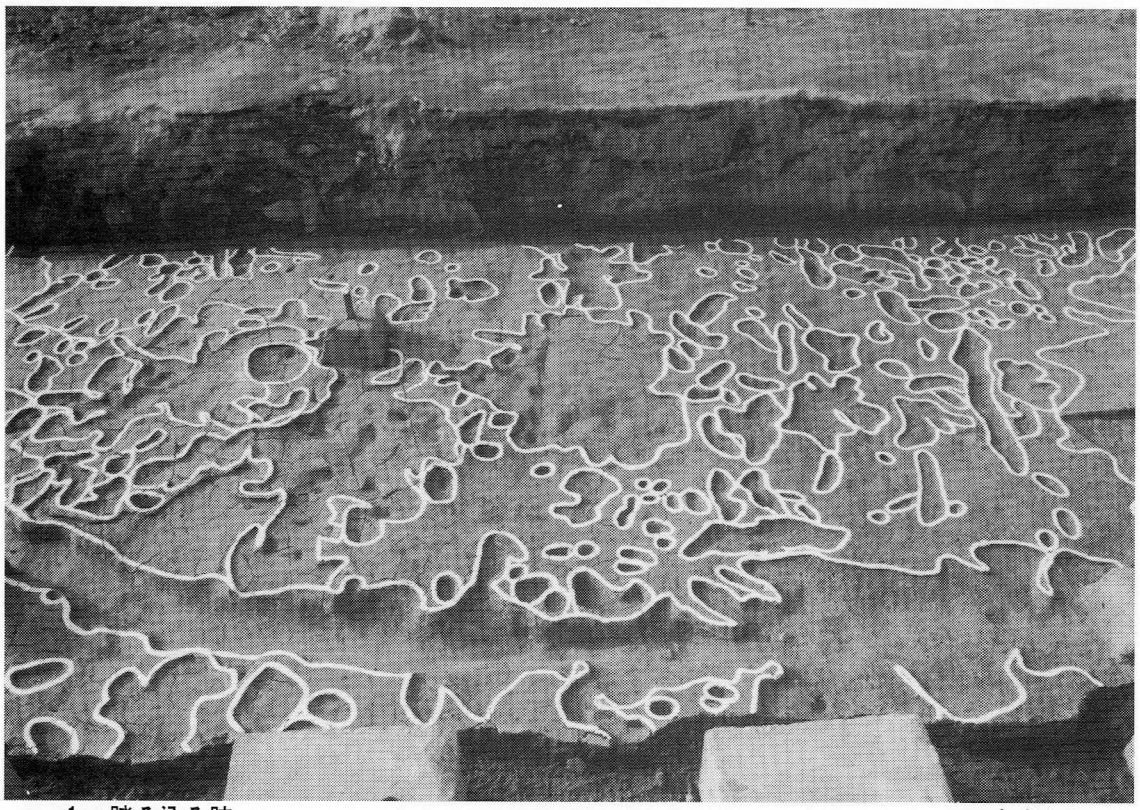
2．H区 地山上面検出遺構　　南西より



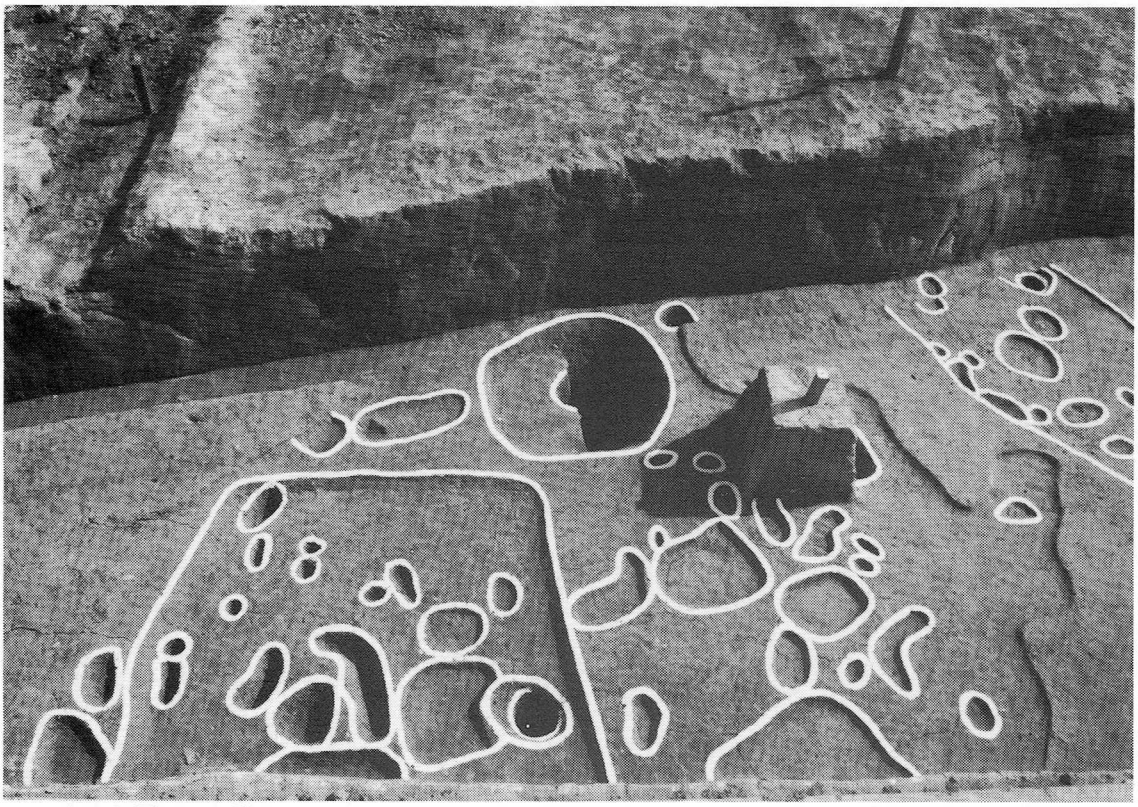
1．Pit－12　　南西より

2．Pit－12 遺物検出状況　　南西より

図版5　検出遺構

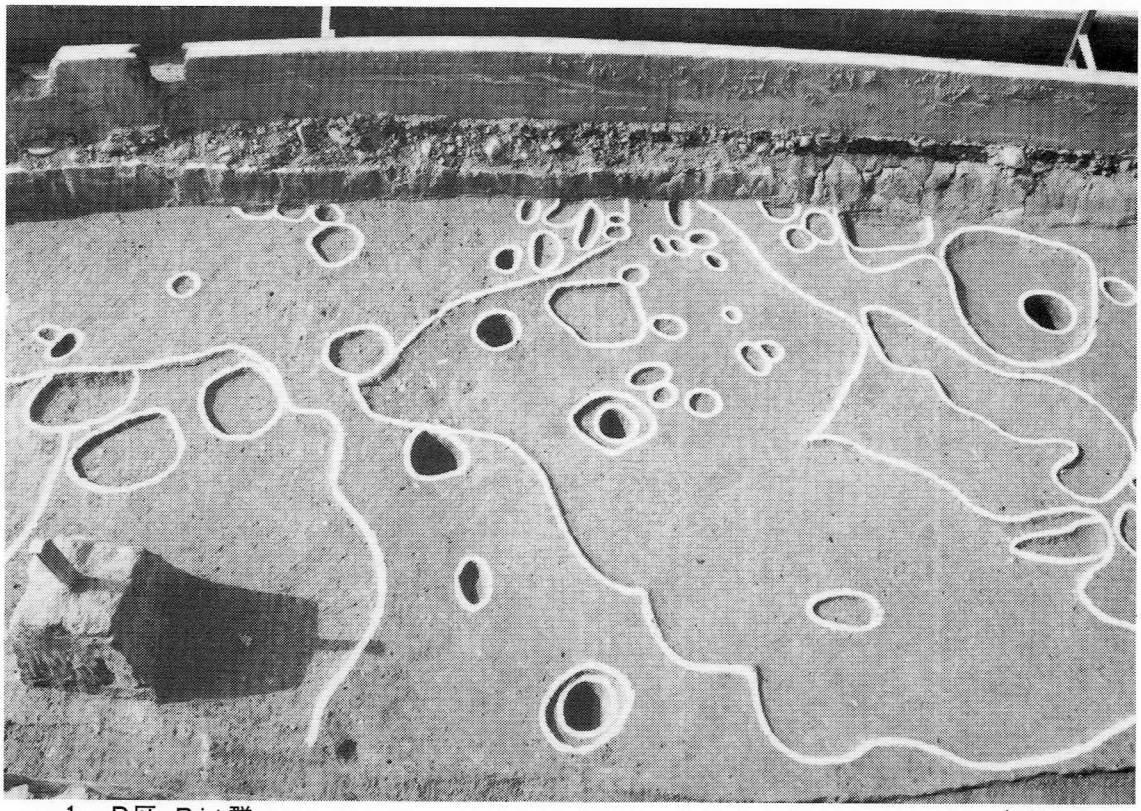


1．踏み込み跡　　南東より

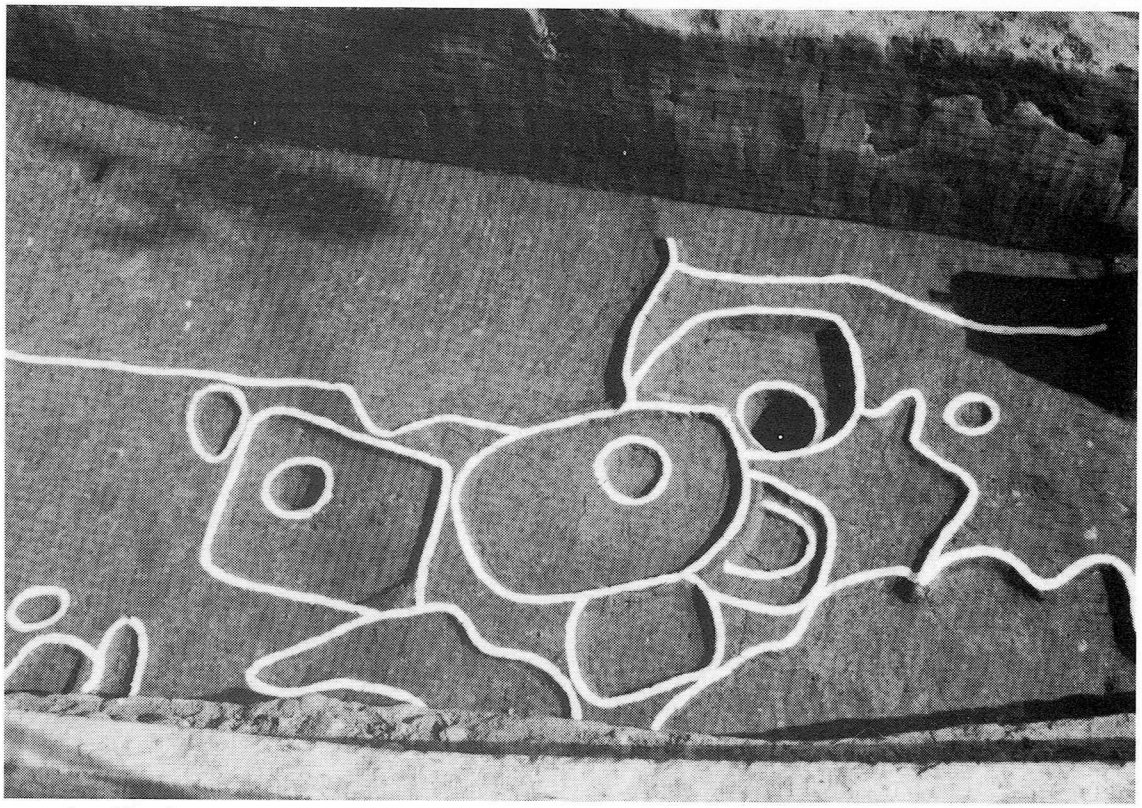


2．D区　Pit群　　北西より

図版6 検出遺構

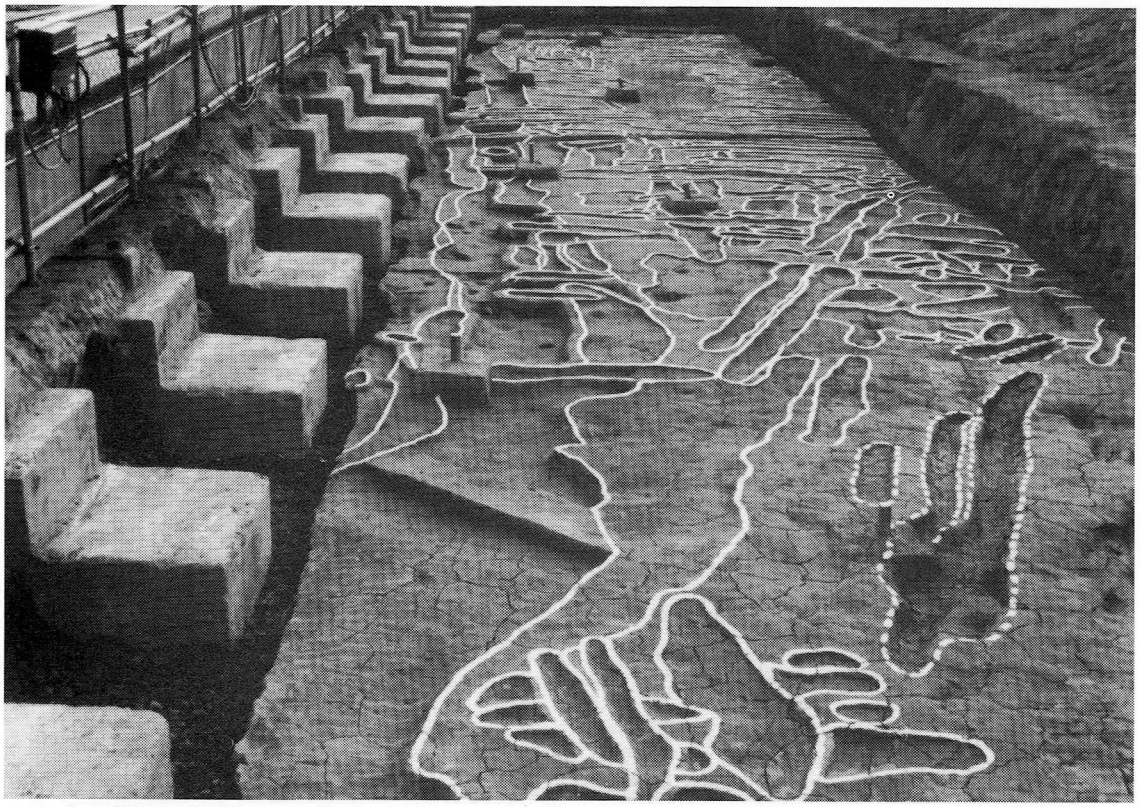


1．D区 Pit群　　南東より

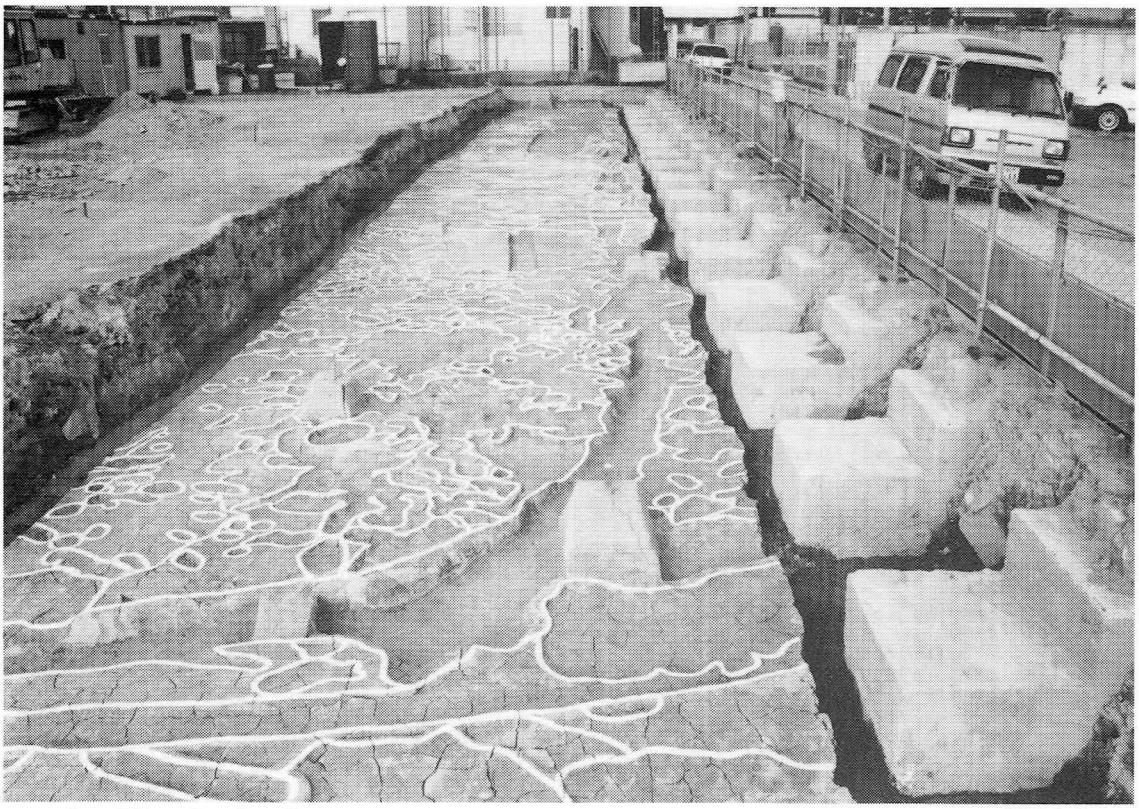


2．同　上　　北西より

図版7　検出遺構

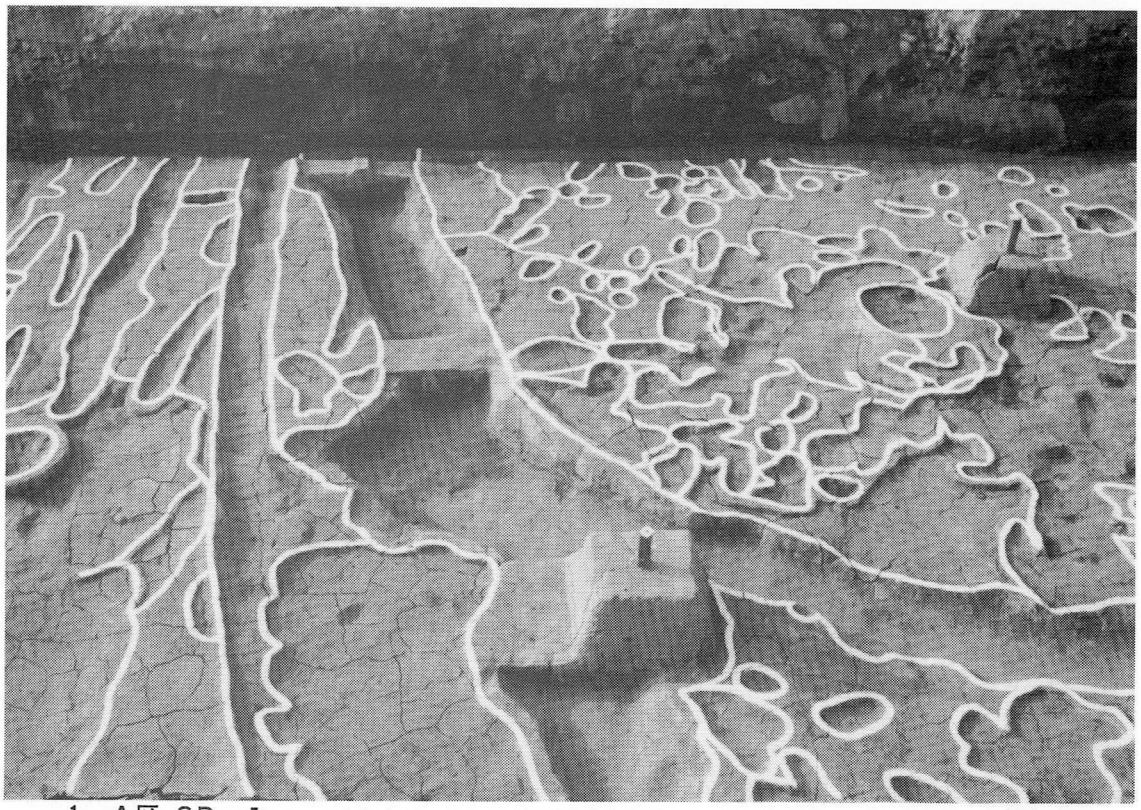


1．SD－3，4　　北東より

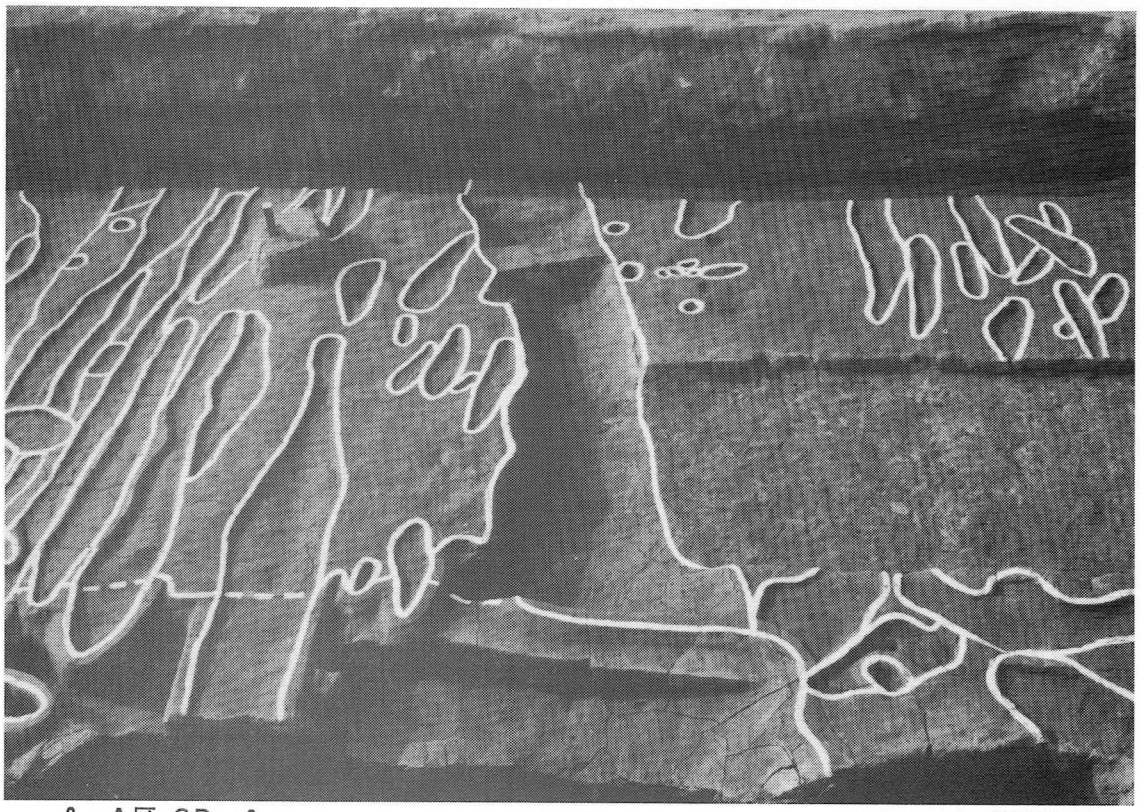


2．SD－5，6，7　　南西より

図版8 検出遺構

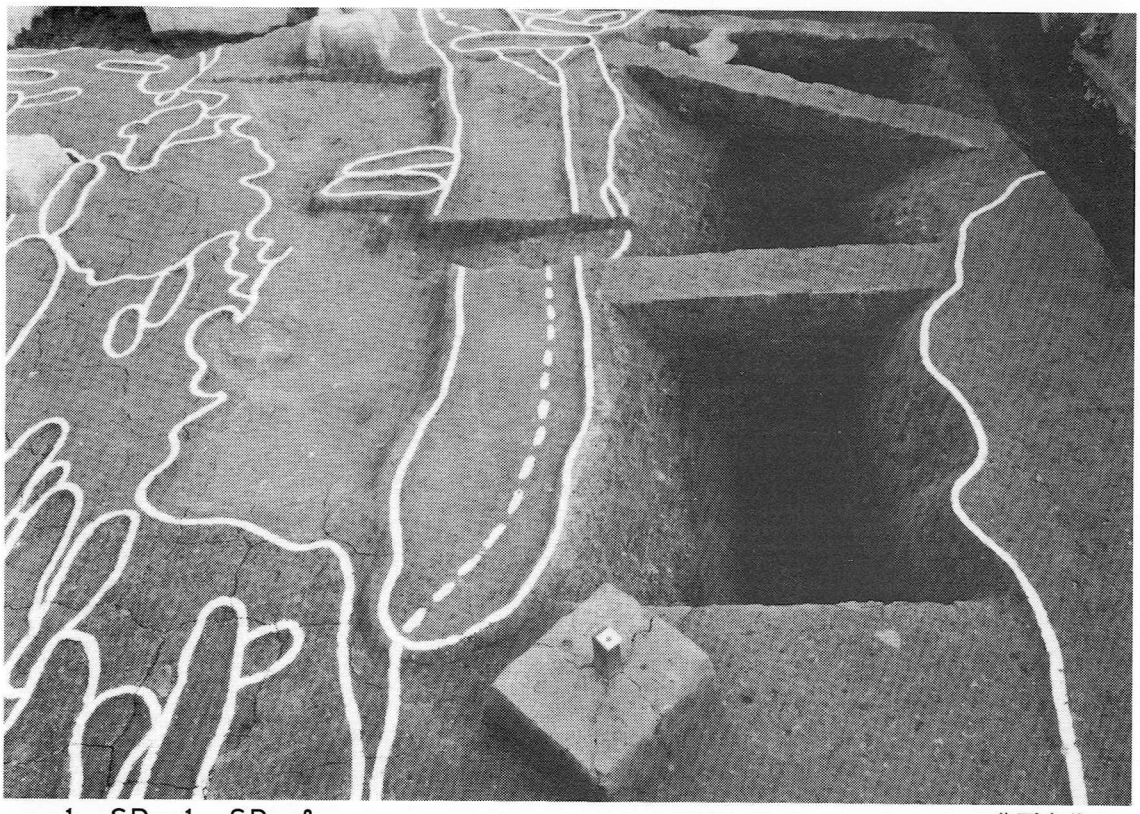


1．A区 SD－5　　南東より



2．A区 SD－6　　南東より

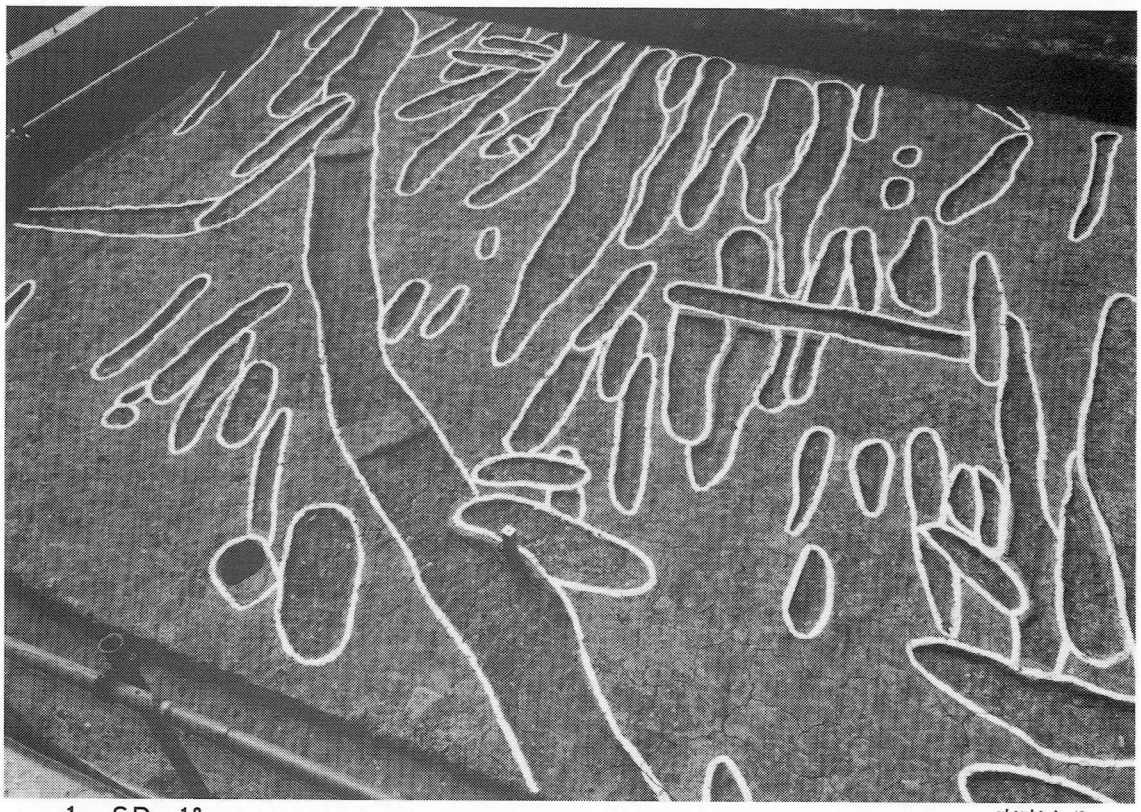
図版9　検出遺構



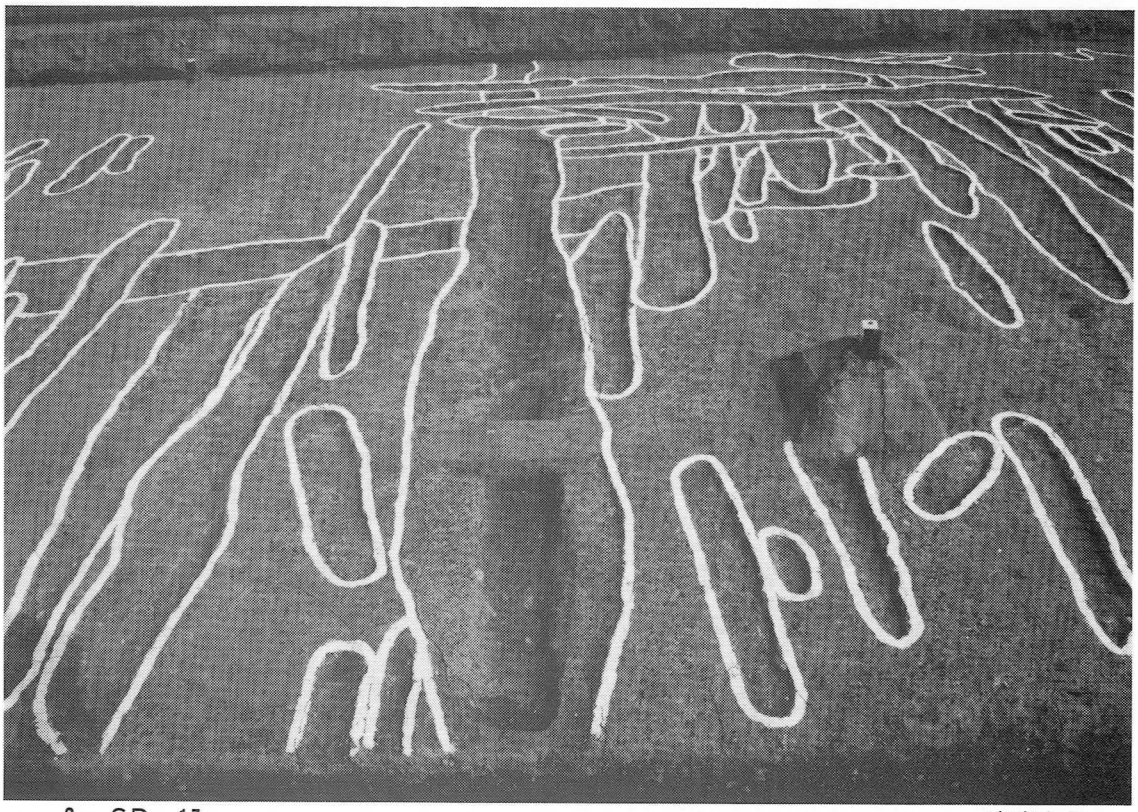
1．SD－1，SD－2　　北西より

2．SD－16　　北東より

図版10　検出遺構

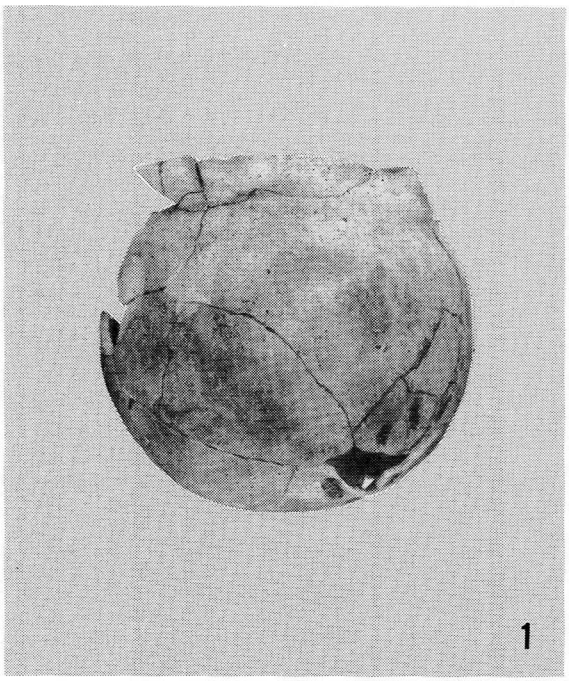


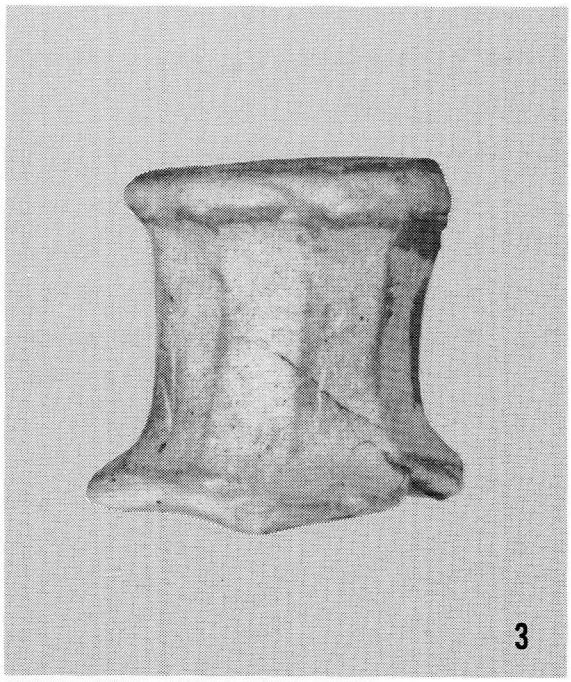
1．SD－18　　南東より

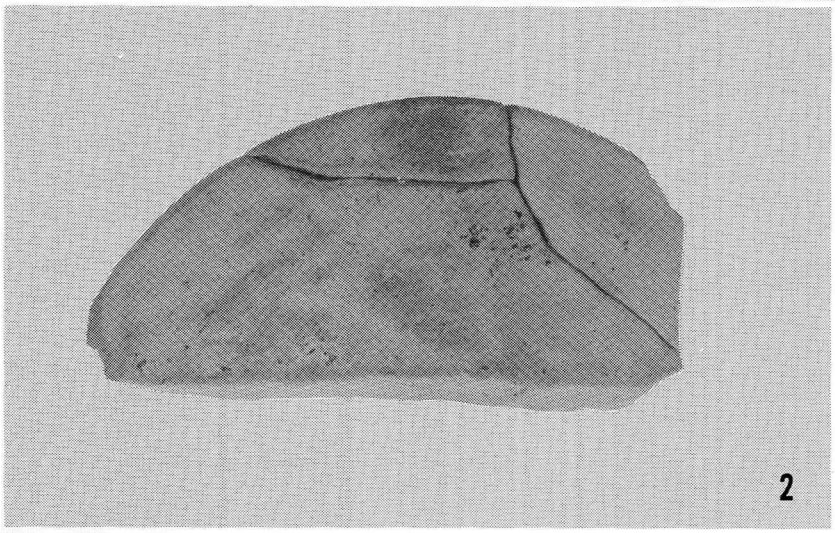


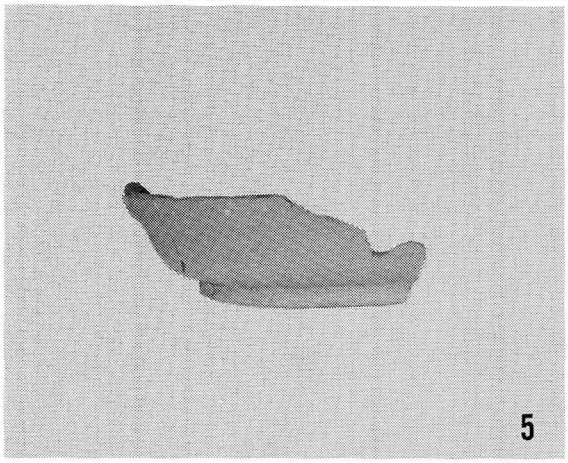
2．SD－17　　南東より

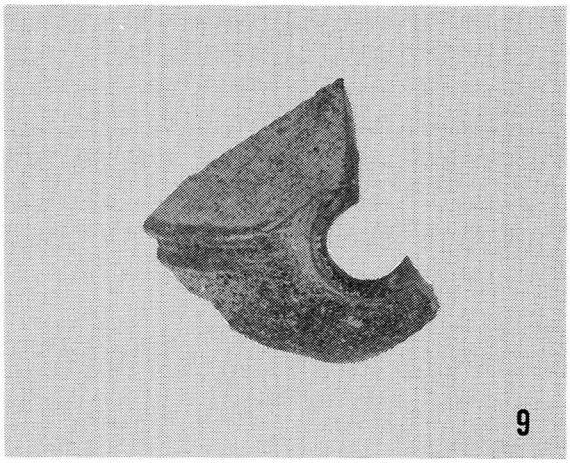
図版11 出土遺物



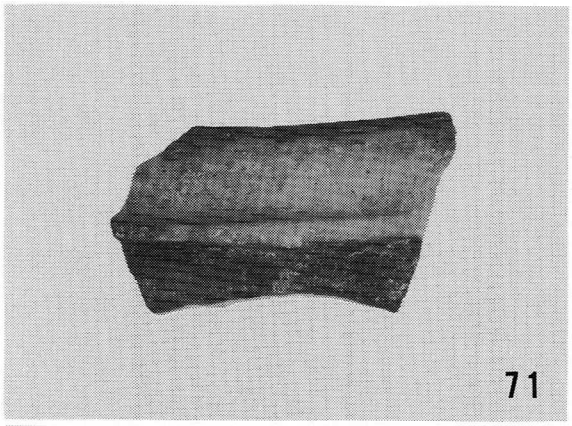


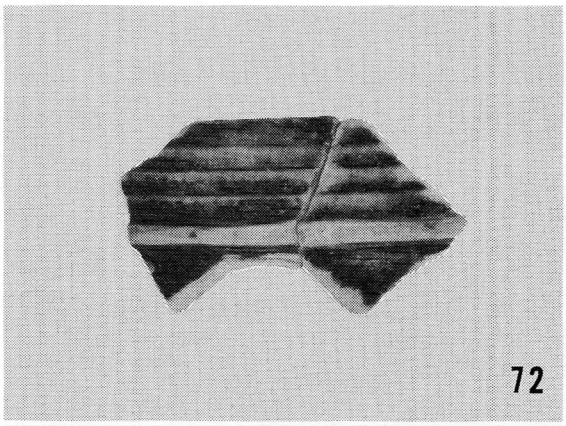


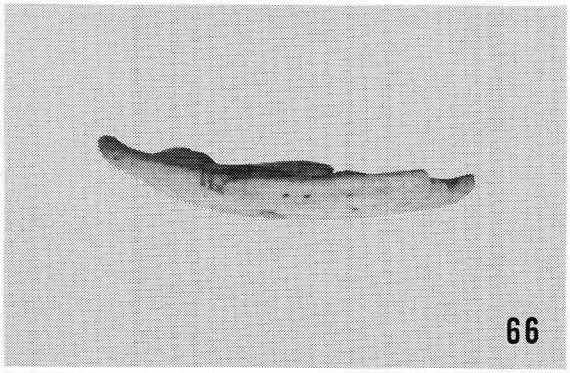


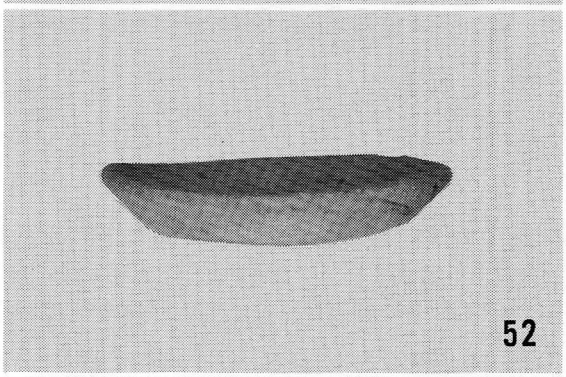


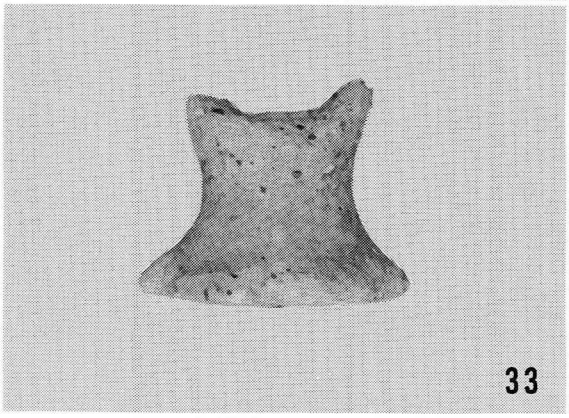
Pit12（1～3，5），Pit16 出土土器

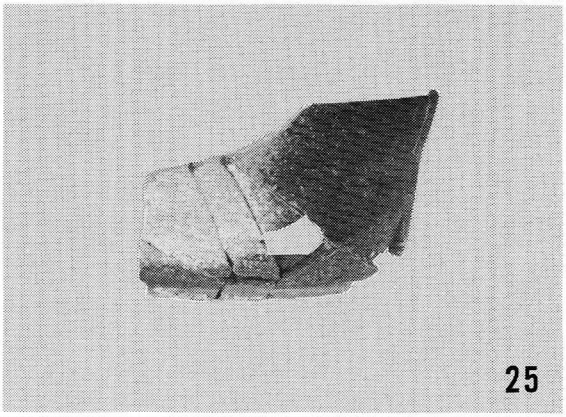


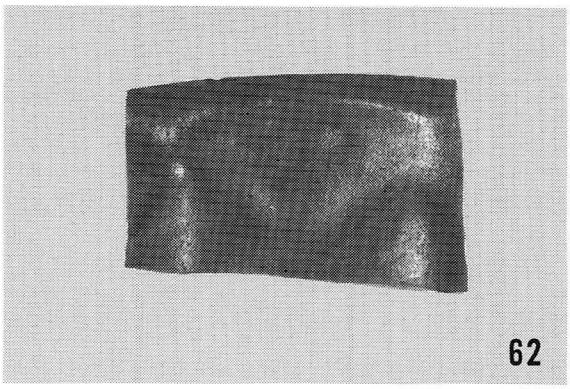


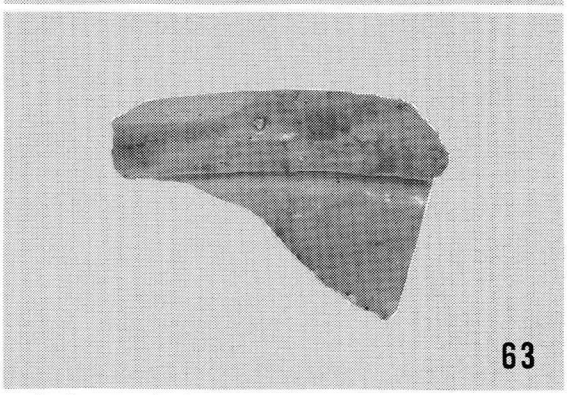




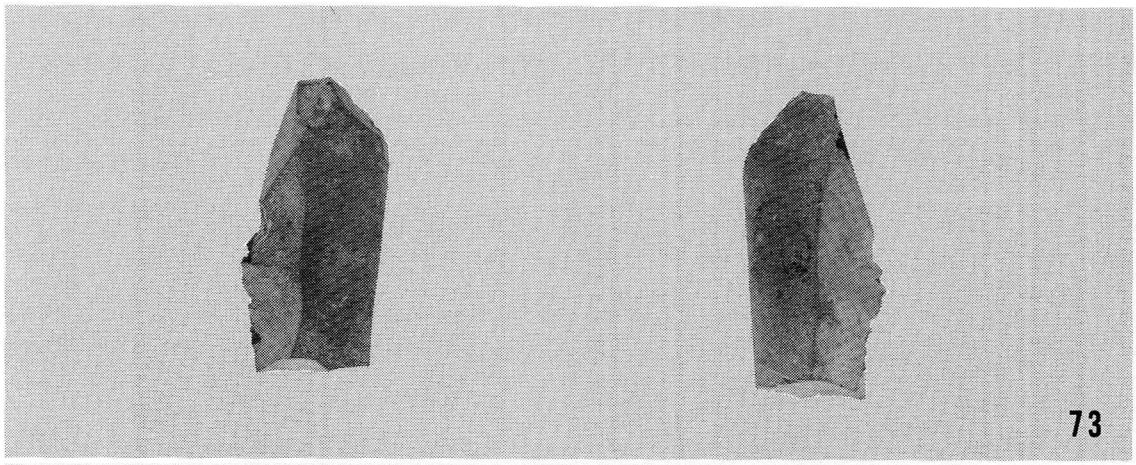


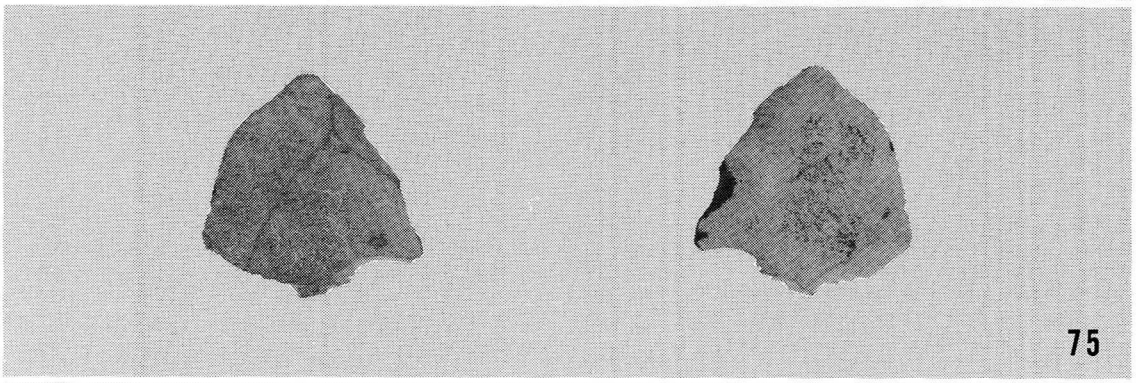


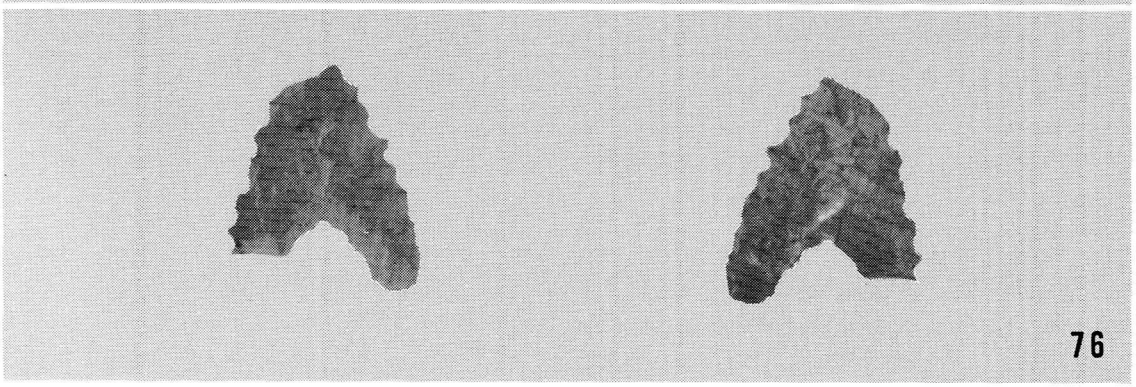




包含層第4層（66,71～72）第5層（ 33,62～63）第6層（25）出土土器







踏み込み跡（73），第6層出土石器（74～76）

貝塚市埋蔵文化財調査報告第30集
加神・神前・畠中遺跡発掘調査概要
発　行　平成 5 年 9 月 30 日
編　集　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中１－17－１
印　刷　㈲山村印刷所
貝塚市近木1483－８

報告書抄録

ふりがな	かじ　こうざき　はたけなかいせきはつくつちようさがいよう
書名	加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要
副書名	都市計画道路文化会館山手線建設に伴う調査
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第３０集
編著者名	上野　裕子、前川　浩一
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号　TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦　１９９３年　９月　３０日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かじ　こうざき 加治・神前 はたけなか ・畠中遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 はたけなか 畠中	27208	２３	34度 26分 10秒	135度 22分 00	19920116 19920626	９７０	都市計画 道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加治・神前	集落跡	奈良時代	溝	須恵器	奈良時代集落
・畠中遺跡		中世	鋤溝 掘立柱建物	土師器 瓦器椀 瓦質羽釜	中世耕作地

貝塚市埋蔵文化財調査報告第30集　正誤表

		誤	正
P５	スケール単位	８ｍ	40m